

立野遺跡

—すさみ町公共施設移転事業に伴う発掘調査報告書—

立野遺跡

—すさみ町公共施設移転事業に伴う発掘調査報告書—

2015年1月 公益財団法人

和歌山県文化財センター

2015年1月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

序

すさみ町は西牟婁郡に位置し、東は串本町と古座川町、西と北は白浜町と境をなしています。南は太平洋に臨み、古来より風光明媚な地として知られています。また、古より大辺路街道は熊野詣の旅人で賑わいました。

すさみ町での発掘調査は、平成22年度（2010年）の近畿自動車道紀勢線建設事業に伴う調査において、弥生時代の川跡から多量の木製品や石器、土器類が出土したことでの話題になりました。木製品には容器や農具、工具などといった多種多様なものがあり、これらの中には製品や製作途中の未製品のものもありました。また、石器にも木製品製作時の加工に使用されたと考えられる磨製石斧や削器も出土しました。このことから、木製品や石器等の製作工房跡が近隣に存在し、同時に水田耕作をしていた村の存在を垣間見ることのできる貴重な資料を得ることができました。

今回の調査はその隣接地を、すさみ町公共施設移転に先立ち発掘調査を実施しました。調査地は谷間の低い場所を調査し、弥生時代から古代にかけての河道（川）が調査地全域に及んでいたことや、微高地には人為的に掘られた土坑や溝を検出しました。既往の調査と合わせて、昔の立野地域周辺の全貌が見え始めました。

ここに発掘調査の成果をまとめ、報告書を刊行いたします。本書の報告内容が古の郷土の姿を知る上での一資料となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査ならびに報告書作成にあたり、ご指導、ご教示いただいた皆様方に厚く御礼申し上げます。

平成26年1月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

理事長 工 樂 善 通

例　　言

1. 本書は、和歌山県西牟婁郡すさみ町周参見に所在する立野遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、すさみ町公共施設移転事業に伴うもので、平成25年度に契約をし、平成26年度に調査を実施し、調査終了後、報告書作成をおこなった。
3. 発掘調査並びに出土遺物整理業務は、「すさみ町公共施設移転事業に伴う立野遺跡発掘調査等業務」として、すさみ町の委託を受け和歌山県教育委員会の指導のもと、公益財団法人和歌山文化財センターが（以下、「県文化財センター」という。）実施した。
4. 調査組織は以下の通りである。

	25年度	26年度
事務局長	里森 修	嶋田文紀
埋蔵文化財課長	井石好裕	井石好裕
発掘調査業務担当		佐伯和也・渋谷高秀・小林充貴
出土遺物整理業務		佐伯和也

5. 本書の執筆・編集は佐伯がおこなった。
6. 発掘調査及び出土遺物整理業務で作成した実測図・写真・台帳等の記録資料は県文化財センターが、出土遺物は報告書作成後和歌山県教育委員会に移管して保管している。

凡　　例

1. 発掘調査並びに出土遺物整理業務は、『財団法人和歌山県文化財センター発掘調査マニュアル（基礎編）』に準拠した。
2. 調査および本書で使用した座標値は、平面直角座標（世界測地系）第VI系を使用した。図に使用した北方位は座標北、標高は東京湾標準潮位（T.P+）である。
3. 発掘調査の土色及び出土遺物整理の土器の土色は、農林水産省農林水産技術会事務局監修「新版標準土色帖」（2010年版）に準じ、土質は調査担当者の判断で付した。
4. 本書で使用した調査区名、遺構番号は発掘調査時のものを踏襲している。遺構番号は1からの通し番号で、欠番も存在する。
5. 遺物図面の縮尺は、土器は1/4、石器は1/2及び1/3で掲載した。遺物写真については任意の大きさで掲載した。
6. 調査で使用した調査コードは、14-41・002（2014年-すさみ町・立野遺跡）で、記録資料はこのコードを用いて管理している。

本文目次

序・例言・凡例

第Ⅰ章 環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	2
第Ⅱ章 経緯と経過	3
第1節 調査に至る経緯と経過	3
第2節 既往の調査	4
第3節 発掘調査	4
第4節 出土遺物整理業務	5
第5節 現地公開	6
第Ⅲ章 調査の方法	6
第1節 調査記録	6
第2節 調査区の地区割り	7
第Ⅳ章 調査の成果	8
第1節 基本層位	8
第2節 遺構	9
第3節 遺物	19
第Ⅴ章 まとめ	24

挿図目次

図1 位置図	1	図9 14区遺構断面土層図1	16
図2 周辺の遺跡	2	図10 14区遺構断面土層図2	17
図3 調査区位置図	3	図11 掘立柱建物・遺構101実測図	18
図4 地区割図	7	図12 包含層出土遺物実測図	20
図5 14区西壁基本層位	8	図13 遺構出土遺物実測図	20
図6 15区上面遺構	10	図14 包含層及び遺構出土の打製石器 実測図	21
図7 15区上面・下面、 14区遺構断面土層図	11	図15 包含層及び遺構出土の礫石器 実測図	22
図8 14区・15区下面遺構	13・14		

写真目次

写真 1 上ミ山古墳石室	2
写真 3 調査風景	5
写真 5 現地公開（遺物説明）	6
写真 7 出土遺物	6
写真 2 弥生時代前期自然流路木製品出土状況	4
写真 4 遺物実測	5
写真 6 ラジコンヘリによる空中写真撮影	6

表 目 次

表 1 土器遺物観察表	23
表 2 石器遺物観察表	24

図版目次

図版 1	2. 14 区・15 区西側全景(北から) 3. 14 区・15 区東側全景(北西上空から)
図版 2	1. 15 区上面全景(北から) 2. 15 区上面遺構 1(北から) 3. 15 区上面遺構 1 断割り状況(南西から) 4. 15 区上面遺構 2(北から) 5. 15 区上面遺構 2 断割り状況(南西から) 6. 15 区上面遺構 5～8(北から) 7. 15 区上面遺構 3・4・9～17(北東から)
図版 3	1. 15 区遺構 3 土層堆積状況(南から) 2. 15 区遺構 4 土層堆積状況(南から) 3. 15 区遺構 5 土層堆積状況(南から) 4. 15 区遺構 6 土層堆積状況(南から) 5. 15 区遺構 7 土層堆積状況(南から) 6. 15 区遺構 8 土層堆積状況(南から) 7. 14 区南側・15 区全景(南東上空から)
図版 4	1. 14 区南側・15 区全景(北から)
図版 5	1. 14 区遺構 18 ドレンチ A 土層堆積状況 (東から) 2. 14 区遺構 18 ドレンチ B 土層堆積状況 (南から) 3. 14 区遺構 18 ドレンチ C 土層堆積状況 (北西から)
図版 6	1. 14 区遺構 19 土層堆積状況(南東から) 2. 15 区遺構 21 完掘状況(北から) 3. 15 区遺構 22 土層堆積状況(南東から) 4. 15 区遺構 23 完掘状況(東から) 5. 14 区遺構 24 セクション 1 土層堆積状況 (南東から) 6. 14 区遺構 24 セクション 2 土層堆積状況 (南東から) 7. 14 区遺構 24 セクション 3 土層堆積状況 (東から)
図版 7	1. 14 区遺構 25 土層堆積状況(東から)

2. 14 区遺構 26 土層堆積状況(南から)
3. 14 区遺構 42 土層堆積状況(南東から)
4. 14 区遺構 43 セクション 1 土層堆積状況
(東から)
5. 14 区遺構 43 セクション 4 土層堆積状況
(南西から)
6. 14 区遺構 44 セクション 1 土層堆積状況
(南から)
7. 14 区遺構 44 セクション 2 土層堆積状況
(北から)
8. 14 区遺構 44 セクション 4 土層堆積状況
(南から)
9. 14 区遺構 44 セクション 3 土層堆積状況
(北から)
10. 14 区遺構 44 セクション 5 土層堆積状況
(南から)

図版 8

1. 14 区遺構 45 土層堆積状況(南から)
2. 14 区遺構 46 セクション 1 土層堆積状況
(西から)
3. 14 区遺構 46 セクション 2 土層堆積状況
(西から)
4. 14 区遺構 46 セクション 3 土層堆積状況
(西から)
5. 14 区遺構 46 セクション 4 土層堆積状況
(東から)
6. 14 区遺構 47 土層堆積状況(南から)
7. 14 区遺構 53 土層堆積状況(南から)
8. 14 区遺構 55 土層堆積状況(南から)

図版 9

1. 14 区遺構 56 土層堆積状況(南から)
2. 14 区遺構 57 土層堆積状況(南から)
3. 14 区遺構 60 土層堆積状況(東から)
4. 14 区遺構 61 土層堆積状況(南から)
5. 14 区遺構 62 セクション 2
土層堆積状況(南から)
6. 14 区遺構 62 台石出土状況
7. 14 区遺構 62 セクション 1

土層堆積状況(南東から)

図版 10

1. 14 区遺構 64 土層堆積状況(南から)
2. 14 区遺構 65 土層堆積状況(南西から)
3. 14 区遺構 76 セクション 1 土層堆積状況
(東から)
4. 14 区遺構 76 セクション 2 土層堆積状況
(北西から)
5. 14 区遺構 79 土層堆積状況(南から)
6. 14 区遺構 81 土層堆積状況(南西から)
7. 14 区遺構 83 セクション 1 土層堆積状況
(東から)
8. 14 区遺構 83 セクション 2 土層堆積状況
(南から)

図版 11

1. 14 区遺構 97 土層堆積状況(北から)
2. 14 区遺構 100 セクション 1 土層堆積状況
(南から)
3. 14 区遺構 110 土層堆積状況(北西から)
4. 14 区遺構 138 土層堆積状況(南東から)

図版 12

1. 14 区北側全景(南上空から)
2. 14 区北側全景(上空から)
3. 14 区北端(遺構 46・62)(東から)

図版 13

1. 14 区遺構 101 遺物出土状況(北西から)
2. 14 区遺構 101 遺物出土状況(西から)
3. 14 区遺構 101 石鏃出土状況(俯瞰)
4. 14 区遺構 101 土層堆積状況(南から)
5. 14 区遺構 101 内出土遺物(写真 1 のアップ)
6. 14 区遺構 101 土層堆積状況(西から)

図版 14

1. 14 区建物 1 全景(南から)
2. 14 区建物 1 全景(北から)
3. 14 区建物 1(遺構 120)断割状況(北から)
4. 14 区建物 1(遺構 121)断割状況(南から)
5. 14 区建物 1(遺構 123)断割状況(南から)

図版 15

1. 14 区西壁土層堆積状況(北から)
2. 14 区東壁土層堆積状況(北から)
3. 14 区北壁(遺構 120 付近)
土層堆積状況(南から)
4. 14 区北壁(現有水路から東)
土層堆積状況(南西から)

図版 16

1. 14 区下層確認 A トレンチ
(現有水路より西側)(南西から)
2. 14 区下層確認 A トレンチ
(現有水路より東側)(南東から)
3. 14 区下層確認トレンチ 2 (北西から)

図版 17・18

- 出土遺物(土器)
図版 19・20
出土遺物(石器)

第Ⅰ章 環 境

第1節 地理的環境

すさみ町は和歌山県西牟婁郡に属し、西と北は同郡白浜町、東は東牟婁郡串本町と古座川町に接し、南は太平洋に面し、枯木灘海岸の一角を占めている。枯木灘は黒潮に洗われ、その自然が織りなす隆起沈降海岸地形の美しさは、昔より風光明媚な地として人々に親しまれ、白浜町から串本町までの約70kmに及んでおり熊野枯木灘海岸県立自然公園に指定されている。町の範囲は東西19.25km、南北15.5kmで、面積は174.71km²を有する。

町域の北部にあっては善司ノ森山、重善岳などの山並みが連なり、獅子目峠を分水嶺として、周参見川が山間部を縫うように南西流し、佐本川が東流して古座川町で古座川に合流する。気候は温暖で海岸部には国指定天然記念物の「稻積島暖流性植物群落」や「江須崎暖地性植物群落」があり、亜熱帯植物も生育している。

交通はJR紀勢線が海岸部を通り、周参見、見老津、江住の各駅があり、線路と沿うように国道42号線が延びる。また、主要地方道として県道38号すさみ古座線、別名「古座街道」が周参見川と佐本川に沿うように通っている。

町の産業は漁業、林業、農業の第1次産業が基幹産業となっている。平地が少なく、町域の90%以上が山林で占められているため内陸部の地区では杉、檜などの林業が伝統的に行われてきたが、昭和40年代まであった多くの製材所も木材不況の煽りを受け衰退している。

農業では米作をはじめ、レタスなどの野菜栽培、ストックなどの花卉栽培、梅栽培が平野部で行われている。戦前に江住村でレタス栽培が始まられ、戦中に一時中断していたが戦後の昭和26年頃から量産と販路拡大を図り、レタス産地としての地位を築きあげ昭和57年にピークを迎えたが、その後価格の低迷や後継者不足もあって生産量は下降の一途を辿っている。

漁業はハワイ伝来といわれる鰹などを対象魚とした「ケンケン漁」やスルメイカ漁、イセエビなどを対象とした刺網漁なども盛んである。

観光では、町内にある試験場で誕生したイノシシとブタの交配種「イノブタ」などにより毎年イノブタレースが開催され、町おこしの一役を担っている。また、マリンスポーツも盛んで、フィッシングやダイビングなどが楽しめるスポットが多い。人口は2014年9月現在で4,288人となっており、年々減少し過疎化が深刻な問題となっている。

立野遺跡が所在する周参見はすさみ町の中心部で周参見川と太間川の下流域に位置する。湾の入口に浮かぶ稻積島は防波堤の役目を果たし、天然の良港をつくっている。遺跡は海岸線から約2.5km遡った低地部に位置する。この辺りは古い時期の周参見川が穿入蛇行した後に形成された平野部にあたり、周辺には比較的まとまった平野部が広がり、標高の高い山際を宅地として利用している。なお、水田は昭和30年代に圃場整備が行われ、整然とした区画で配置されている。



図1 位置図

第2節 歴史的環境（図1）

すさみ町では原始・古代として認知されている遺跡は少ない。縄文・弥生時代では縄文土器片が周参見駅の東側で発見され、町南部の里の遺跡で石斧が出土しているが遺跡の詳細は不明である。この他、立野遺跡で弥生前期の土器類、木製品、石器が、周参見湾の奥まったところの丘陵部に位置する小泊遺跡で弥生土器片が見つかっている。

古墳時代の遺跡では上ミ山古墳（写真1）が有名である。上ミ山古墳は昭和45年に造成工事の際に発見された不時発見の後期古墳である。規模は、径40m、高さ4mの円墳で、葺石が葺かれていたことが確認されており、紀南地方では数少ない古墳の一つである。内部主体は、築造時は3箇所あったことが確認されており、工事で2箇所が破壊されている。石室は2枚の石障で3区画に仕切られ、羨道は右片袖式となる。遺物は須恵器や武器・工具・玉類が出土しており、これらの遺物から6世紀前半の築造と考えられている。

立野遺跡からは須恵器、土師器が出土しており、小泊遺跡からも須恵器や製塙土器が出土していることから海岸沿いでは塩造りが行われていたことが窺われる。

古代の遺跡は明らかにはなっていないが、律令制下では牟婁郡に帰属し、「和名抄」にある牟婁郡5郷のうち、「三前郷（みさきのごう）」に属していたと考えられる。

中世（鎌倉時代前期）には荘園として「周参見荘」の名が文献に現れ、鎌倉時代後期には那智山領であったことが窺える。戦国期には周参見氏が日高川下流域を掌握する安宅氏とともに熊野水軍の一翼を担った。周参見氏は周参見川下流域に本拠をおき、神田城・周参見城・中山城・藤原城などの山城を築き、敵の侵入を阻んでいる。これらの城は保存状態が良好で、土壘や堀切などが構築され、防御性の高いものである。狭い地域内に多くの城が存在する状況は、同じ水軍領主である安宅氏の城砦群と酷似している。

周参見港は入り口を塞ぐように浮かぶ稻積島によって荒波が遮られ、古くから海上交通の風待港や避難港として重要視してきた。また世界遺産にも指定されている大辺路仏坂を下った古道は周参見の町中を通り海岸線を南下し、周参見と古座を結ぶ「古座街道」も交差しているところから、周参見は海路と陸路の要衝の地となっていた。このため近世には紀南支配の中心地として

紀州徳川家の口熊野奉行所が置かれ、東は太田川（那智勝浦町）から西は瀬戸鉛山（白浜町）に至る157カ村、石高19,373石の地域を管轄する地方政治の中心地として栄えた。

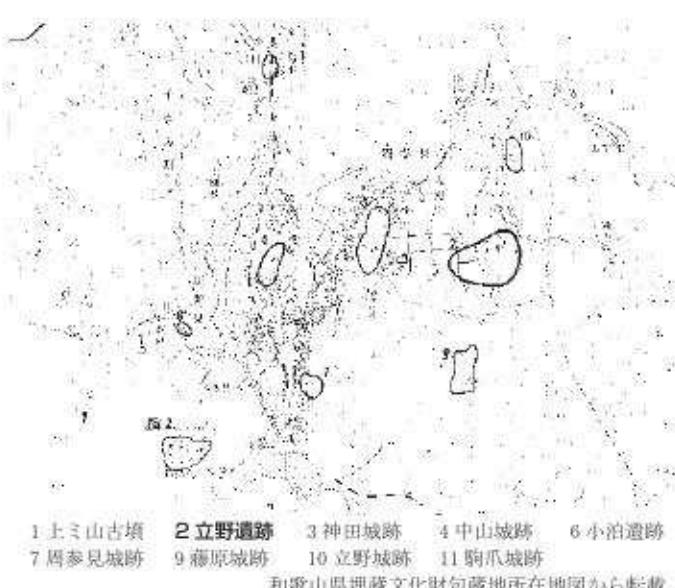


図2 周辺の遺跡



写真1 上ミ山古墳石室

第Ⅱ章 経緯と経過

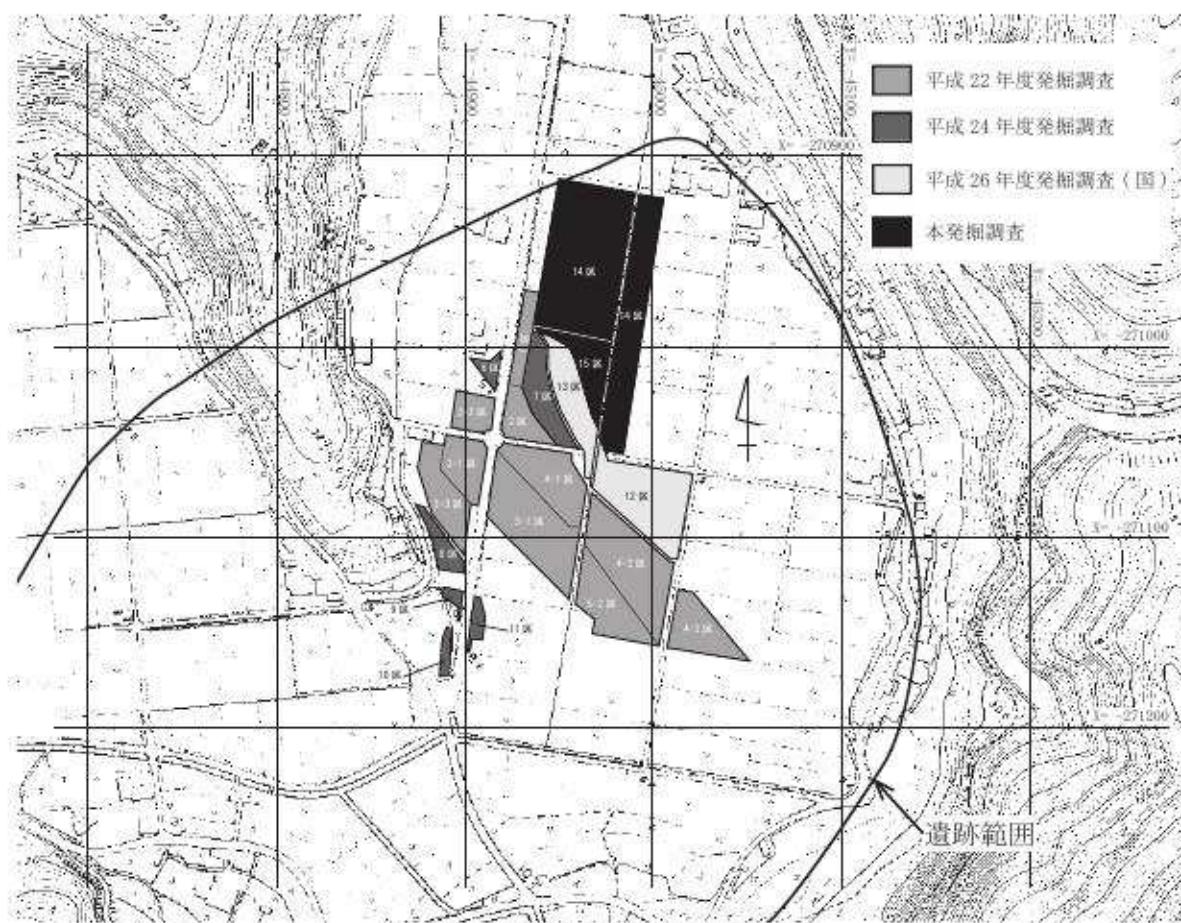
第1節 調査に至る経緯と経過

すさみ町により、すさみ町公共施設移転事業が計画され、その事業予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である立野遺跡の範囲に該当することから、すさみ町から平成25年10月28日付け文書により文化財保護法第94条の通知が提出された。これを受け、確認調査が必要である旨を和歌山県教育委員会が平成25年10月31日付け文書で通知した。

その後、立野遺跡にすさみ町公共施設移転事業が及ぶ範囲について、平成25年11月7日付け文書ですさみ町より和歌山県教育委員会に発掘調査の依頼があり、平成25年11月8日に和歌山県教育委員会が受諾し、生涯学習局文化遺産課ですさみ町公共施設移転事業に伴う立野遺跡確認調査として実施した。

生涯学習局文化遺産課の確認調査の実施は、平成25年11月12日から12月17日にかけて行なわれた。なお、隣接地で計画されている近畿自動車道紀勢線建設に伴う立野遺跡確認調査と併せて実施したため、調査成果を相互に判断して記録保存が必要とされる範囲について調査対象地としている。

なお、今回発掘調査を実施した面積は、14区と15区を合わせ6,079m²であった。



第2節 既往の調査（図3）

1. 平成22年度の調査（注1）

調査地は、本調査地の南南西約30～150mの地点を8,526m²の調査を実施した。検出遺構には弥生時代前期・中期、古墳時代、奈良時代の自然流路や弥生時代末から古墳時代初頭、平安時代末から鎌倉時代にかけての水田区画がある。遺物では弥生時代前期から中世にかけての各時代の遺物が出土した。しかしながら、この調査では堅穴住居等の遺構は検出されなかつたが、検出された遺構や出土遺物によって、この付近では弥生時代前期から中世・近世まで集落が連綿と営まれていたことは否めない。中でも、西側の山裾で検出された自然流路（遺構302）からは木材が折り重なり出土し（写真2）、それらの間からは木製品・石器・土器が多量に出土した。特に木製品については容器・農具・工具・狩猟具等と多種多様で、製品や製作途中のものがあった。このような状況から、縄文時代から弥生時代の過渡期における農耕社会成立期の木製品の生産を考える上で貴重な資料を得たものといえる。

2. 平成24年度の調査（注2）

調査地は平成22年度の調査区に隣接し、現有町道の北側と南側に沿う形で行われた。調査面積は1,249m²であった。検出した遺構には隣接地（平成22年度調査）で検出した弥生時代、古墳時代、奈良時代の自然流路の続きなどがあり、土器類や木製品などが出土し、調査範囲の北東側と南側にまだまだ遺構が延びることを確認している。

第3節 発掘調査（写真3）

本調査はすさみ町公共施設移転事業に伴う立野遺跡発掘調査等業務として実施した。調査は工事請負方式で実施し、発掘調査工事として有限会社和深建設に発注し、航空写真測量を株式会社共和に委託した。

実質の現地調査は、平成26年5月2日から機械掘削を開始し、平成26年9月16日に埋戻し完了写真を撮影し現地を引き上げた。次に、この間の主だった作業を実施順に記す。

調査区の現況は水田で、14区、15区の2区に分け調査した。遺構検出面は14区が1面、15区が2面である。なお、調査区の呼称の基となるものは、近畿自動車道紀勢線建設に伴う第1次調査（1区～5区）、第2次調査（12区・13区）及びすさみ西インター建設に伴う調査（6区～11区）において作業工程上付した地区割りを踏襲するものである。

機械掘削は、隣接地すでに調査を先行していた上述の第2次調査の13区と整合性を図るために15区の南側から開始した。15区の機械掘削終了後、包含層の人力掘削を行い、遺構検出及び遺構掘削を実施した。その後、記録図面作成・写真撮影終了後、ラジコンヘリによる第1回航空写真測量を請負業者により実施した。続いて15区の下面調査に入り、包含層を地山面まで掘り下げた。なお、14区の機械掘削は15区の下面遺構検出時の包含層掘削と併行して行い、南側か



写真2 弥生時代前期自然流路木製品出土状況

ら開始した。従って、第2回目の航空写真測量は14区の南側一部と15区の下面を同時に実施した。第2回目航空写真終了後、遺構検出状況も精査して良好な状態であるため、現地公開を7月19日(土)に実施した。現地公開は主にすさみ町住民を対象としたもので、現地調査の説明と第1次調査で出土した遺物展示を行い、これらの遺物説明を行った。

次に、14区南側の機械掘削終了箇所の包含層掘削を行いながら、14区北側の機械掘削を実施し、地山面まで包含層掘削を実施し遺構検出を行った。今まで、14区南側及び15区で検出した遺構は旧河道跡が殆どを占めていたが、14区の北側にゆくに連れて検出面の標高が高くなり、弥生時代の溝や土坑状遺構などの明瞭な遺構が検出され始めた。これらの遺構掘削、個別遺構図面作成・写真撮影を終了後、第3回航空測量対象範囲を精査し測量を実施した。調査の最終作業として、調査区の東西方向に下層確認トレンチを機械により掘削し、土層堆積状況の図面作成及び写真撮影を実施した。その後、埋戻しを行い調査を完了した。

第4節 出土遺物整理業務(写真4)

整理作業は、発掘調査で出土した遺物収納コンテナで9箱分の遺物(土器類・石器類)について実施した。

検出遺構はその種類にかかわらず、通し番号で遺構番号を付した。また、調査終了後、遺構番号順に調査区・地区・種別・規模・出土遺物の有無などを記した一覧表を作成し、遺構台帳として管理している。出土遺物については、調査時の遺物登録番号を踏襲し、破片に遺跡コードと登録番号を注記し、接合作業、補強・復元作業の後、遺物登録台帳を作成して管理している。

調査記録は写真撮影と図面作成を行った。写真撮影については4×5判(モノクロ・リバーサル)、6×7判(モノクロ・リバーサル)、35mm(リバーサル)のフィルムを使用した。4×5判フィルムについては、主として全景写真撮影に使用した。1200万画素相当のデジタルカメラを補助的に使用し、デジタル画像データには内容を記入して保存している。また、航空写真測量時に委託業務として撮影した調査地の遠景・近景・俯瞰写真については納入成果品の一部として保管している。

発掘調査時の記録図面は、航空写真測量によるS=1/50の遺構平面図と、調査員によるS=1/10・1/20の遺構実測図(遺構断面図・遺構平面図)、S=1/20の調査区壁面土層図、S=1/100の遺構配置図を作成した。

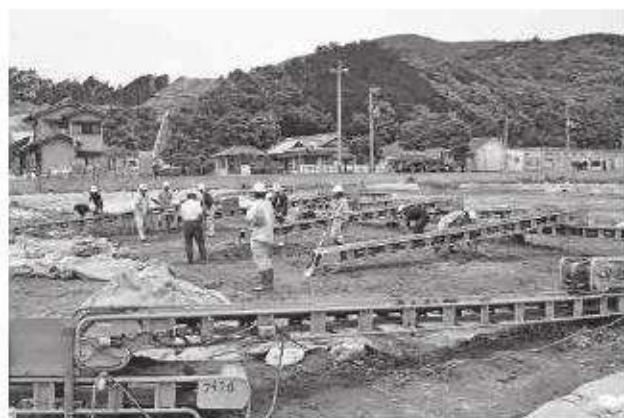


写真3 調査風景



写真4 遺物実測

第5節 現地公開（写真5）

調査成果は、周辺住民を主たる対象とし、現地公開という形で実施した。現地公開案内のビラは立野区長を通して周辺住民へ配布して頂き、その周知にご尽力を賜った。

現地公開は平成26年7月19日（土）に別事業である近畿自動車道関連の第2次調査と合同で実施し、本遺跡の調査内容および出土遺物の説明等を行った。なお、本調査並びに別事業からの出土遺物が少量であったため、平成22年度調査（近畿自動車道紀勢線事業に伴う立野遺跡発掘調査）の旧河道（遺構302）から出土した土器、木器、石器を県教育委員会から借用して展示し、これらについての説明を行った。当日は地元の人を中心として約30名の参加者があった。



写真5 現地公開（遺物説明）

第III章 調査の方法

第1節 調査記録

当遺跡の調査は、当センターの定めた『発掘調査マニュアル（基礎編）』（2006.4）に準拠して実施した。

発掘調査で使用した調査コードは、14-41・02-2（2014年度一すさみ町・立野遺跡）である。但し、同年に同遺跡で別事業としての発掘調査（12・13区）があり、本調査の資料全般を管理するにあたり紛らわしくなるため末尾に-2を付した。出土遺物、記録資料（図面、写真等）はこの調査コードを用いて管理している。

調査時の出土遺物については、遺物カードに調査コード、登録ナンバー、地区名、遺構ナンバー、層位、取上げ日を記入して登録ナンバー毎にナイロン製ネットに収納した。出土遺物は遺物収納コンテナに9箱（写真7）であった。

記録資料の平面実測図は、遺構配置図をS=1/100、調査区壁面土層図をS=1/20、各検出遺構の平面図・断面図をS=1/20で実測している。また、航空写真測量を専門業者に委託してS



写真6 ラジコンヘリによる空中写真撮影



写真7 出土遺物

= 1/50 の縮尺で平面実測図を作成している。

同じく記録資料として写真撮影作業も併せて行った。フィルムは4×5判モノクロ・リバーサル、6×7判モノクロ・リバーサル、35mmリバーサルを使用し、補足的にデジタルカメラも使用した。撮影は調査員が行った。

調査区の全景写真は、写真撮影用足場を組んで調査員が撮影し、航空写真測量委託業務の一環として、上空からラジコンヘリコプター（写真6）による遺跡遠景、調査地近景、遺構の俯瞰などのカットを撮影した。なお、航空写真測量は調査の工程上3回に分けて行った。これについての成果品は原図、出力図、データファイル、密着写真等で納入されている。

第2節 調査区の地区割り（図4）

遺構実測図作成や遺物取り上げの際に用いた地区割りの基準線は、平面直角座標系（世界測地系）第IV系の座標軸を使用し、立野遺跡を網羅する区切りのいい北東隅の数値を地区割りの基点（X = 270.00km, Y = -45.00km）とした。なお、この基点の座標は平成22年度に実施された近畿自動車道紀勢線事業に伴う立野遺跡発掘調査に準拠した。

この基点から、西方向および南方向に各々100m毎に区切った区画を1単位とした大区画を設定し、基点から西方向へ大文字アルファベットでA～Jと、南方向へアラビア数字で1～10と表記した。さらに大区画の中で4m四方の区画を1単位とした小区画を設定し、北東端を基点とし西方向へアルファベット小文字でa～yと、南方向へアラビア数字で1～25と表記した。遺構図作成や遺物取り上げの際には原則として、4m四方の小区画で行い、大区画と小区画を組み合わせて表記した。（例：D-4, g・13）

方位は座標北を使用し、標高は東京湾平均海面（T.P.）からのプラス値を使用した。

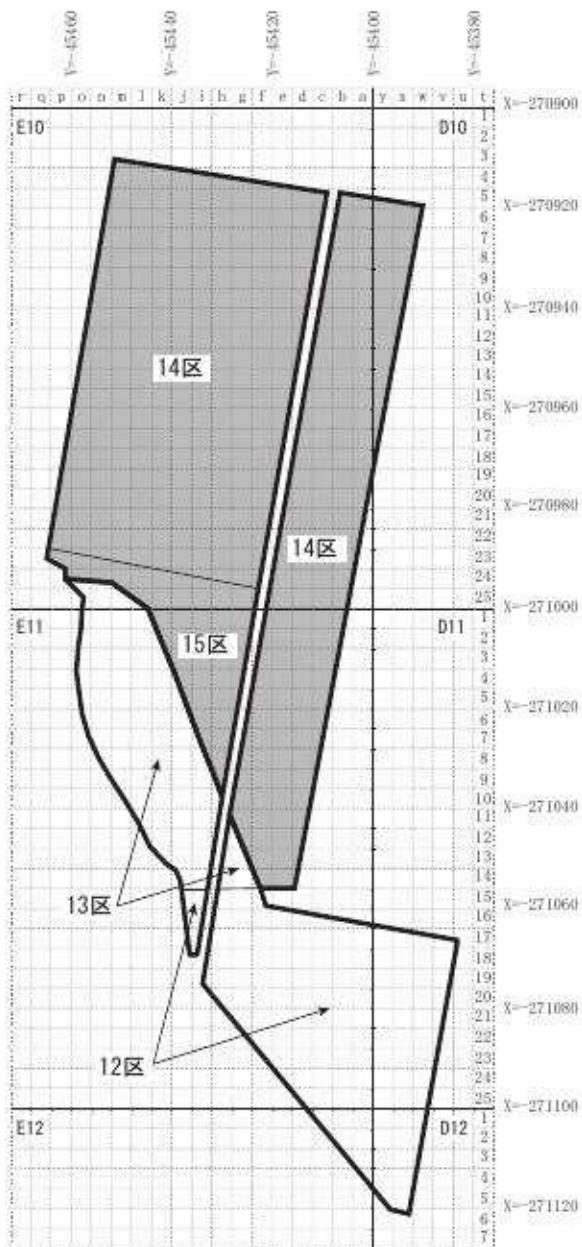


図4 地区割図 (4m 区画) (S=1/1500)

第IV章 調査の成果

第1節 基本層位（図5）

掘削は、基本的に和歌山県教育委員会文化遺産課の試掘データに基づき、機械掘削と人力掘削を行った。ただ、調査区14区の北東隅は地山が高くなり、包含層の存在が認められなかつたため、遺構検出面上の10cmまでを遺構面保護層として残し、人力で遺構検出面まで掘り下げた。遺構面保護層掘削後に遺構を検出し、遺構を掘削した。

調査地の基本層序は、1～8層に分層した。上層から、第1層は現在の水田耕作土である。第2層は灰黄褐色シルト層を基調とする江戸期から近現代までの水田耕作土である。第3層は調査区の殆どの範囲で確認できた黒褐色シルトを基調とした層で、上下の第2層及び第4層と明確に区分でき、調査地の鍵層となる層である。中世後半から近世に帰属すると考えられる。第4層は灰黄色シルトを基調とした層で、既往の調査から中世前半頃の堆積層である。第5層は部分的に堆積が認められないが、黒褐色シルトを基調とする古墳時代から古代にかけての堆積層である。第6層は灰オリーブ色シルトを基調とし弥生時代中期から古墳時代の遺物を含んでいる。第7層は部分的にしか認められないが、灰色シルトを基調とし弥生時代の遺物を包含する。第8層は地山で、無遺物層である。調査地の南側ではオリーブ灰シルト、北側は礫層、黄色系シルトとなる。なお、地山は調査地の北方向にゆくに連れて高くなり、北東及び北西方向はより高くなる。この状況は、調査開始前の地形と同様で、現況の水田は北から南に檀上に下がった状況にあった。また、東側と西側は民家が建ち並び、水に浸ることのない高処となっている。

以上の基本土層で、第3層から第6層は水平堆積を呈しており、この状況から水田に伴う土層であると考えられる。

遺構検出は、15区は第4層上面及び第8層（地山）上面の2面で、14区は第8層（地山）上面で行った。

本調査において旧河道を検出した。旧河道の範囲は調査区のほぼ全域に及ぶため、正確な範囲および、その下層の土層堆積状況を確認するために、調査終了直前にトレントを東西方向に設定し、断割ったところ遺構検出面から下層は、砂層、礫層の互層となり無遺物層であった。現在のように水田化される以前は旧河道が縦横無尽に流れていたことが窺えられる。なお断割りは、崩落の危険を伴うため深さ約1.0m弱で断念した（図版16）。

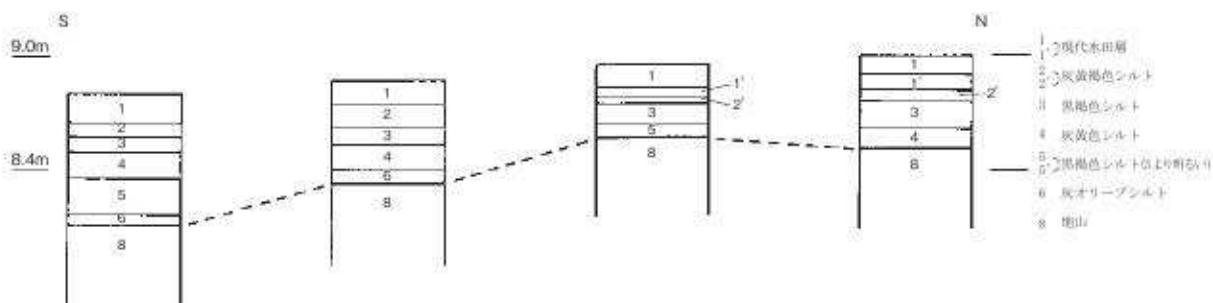


図5 14区西壁基本層位 (S=1/40)

第2節 遺構（図6・7）

調査を実施した15区、14区の順で記述する。15区の検出面は2面で、上面の遺構は第4層上面で、下面是8層（地山）上面で検出した。14区は地山上で検出した。

【15区上面検出遺構】（図6・7、図版1～3）この地区では、土坑状遺構や落込み状遺構、ピット状遺構などを検出した。

（遺構1）（図7、図版2）調査区の東側で検出した落込み状遺構である。東側は現有の水路で攪乱されている。規模は南北長30m、東西長8.7mを測る。残存の深さは0.05～0.1mで、埋土は木屑片等の有機物を含む7.5Y5/2（灰オリーブ）シルトの単層である。遺物は微量の弥生土器片や土師質土器片、砥石片が出土した。

（遺構2）（図7、図版2）遺構1の北側に近接して検出した。遺構1と同様の落込み状遺構である。規模は東西長8.9m以上、南北長8.7m以上を測り、残存の深さは0.06～0.16mを測る。埋土は遺構1と同様である。ここからの遺物は皆無であった。

（遺構3）（図7、図版3）調査区の北西隅で検出した南西から北東方向に流れていたと考えられる溝状遺構である。この辺りは高處となり、地山上で検出した。規模は長さ3.0m以上、幅1.1mを測る。残存の深さは約0.2mである。埋土は2層に分層でき、上・下層ともに黄灰色シルトである。上層からは弥生土器の破片が2点出土した。

（遺構4）（図7、図版3）遺構3の東に近接して、地山上で検出した土坑状遺構である。規模は南北長3m以上、東西長1.7mを測り、残存の深さは0.06mと浅い。埋土は7.5Y6/2（灰オリーブ）シルトの單一層である。弥生土器と考えられる細片3片が出土した。

（遺構5～8）（図7、図版2・3）調査区北端で検出した4基の土坑状遺構である。残存の深さも全ての土坑について0.04～0.06mと非常に浅い。形状は梢円形（遺構5・7）、不定形（遺構6）、アーバー状（遺構8）と様々で、埋土は單一の5Y5/1（灰）微砂混じりシルトである。何れの土坑状遺構からも出土遺物は皆無であった。

他にはピット状遺構を9基（遺構9～17）検出した。直径0.2～0.4mの円形を呈し、深さも0.2～0.4mを測る。何れのピットからも出土遺物は皆無であった。6基のピットは單一層で5Y5/2（灰オリーブ）微砂混じりシルトで、他の3基については明瞭に2層に分層でき、上層は5Y5/2（灰オリーブ）微砂混じりシルト、下層は5Y6/2（灰オリーブ）シルトである。

【15区下面検出遺構】（図8、図版3・4）遺構は調査区北西側で検出した。検出した遺構は旧河道（流路）、土坑状遺構3基で、何れの遺構も残存状況は良好でなく、後世の削平を受けたものと考えられる。旧河道については、調査地全体に渡って検出されたため、14区検出の遺構で記す。

（遺構21）（図7、図版6）形状は南北方向に長い梢円形を呈し、規模は東西1.1m、南北2.1mを測る。残存の深さは中央の最も深い箇所で0.06mと非常に浅い。埋土は單一層で2.5Y6/1（黄灰）シルトである。ここからの出土遺物は皆無である。

（遺構22）（図7、図版6）遺構21の西に隣接して検出した土坑状遺構である。規模は0.6×1.2mの梢円形を呈する土坑状遺構である。残存の深さは中央で0.04mと非常に浅い。埋土は粘性の強い5Y6/1（灰）シルトの單一層である。ここからの出土遺物も皆無であった。

（遺構23）（図7、図版6）遺構22の西側で検出した土坑状遺構である。形状は梢円形を呈し、規模は0.6×0.8mを測る。残存の深さは0.05mと浅い。埋土は、遺構22と同様である。出土遺

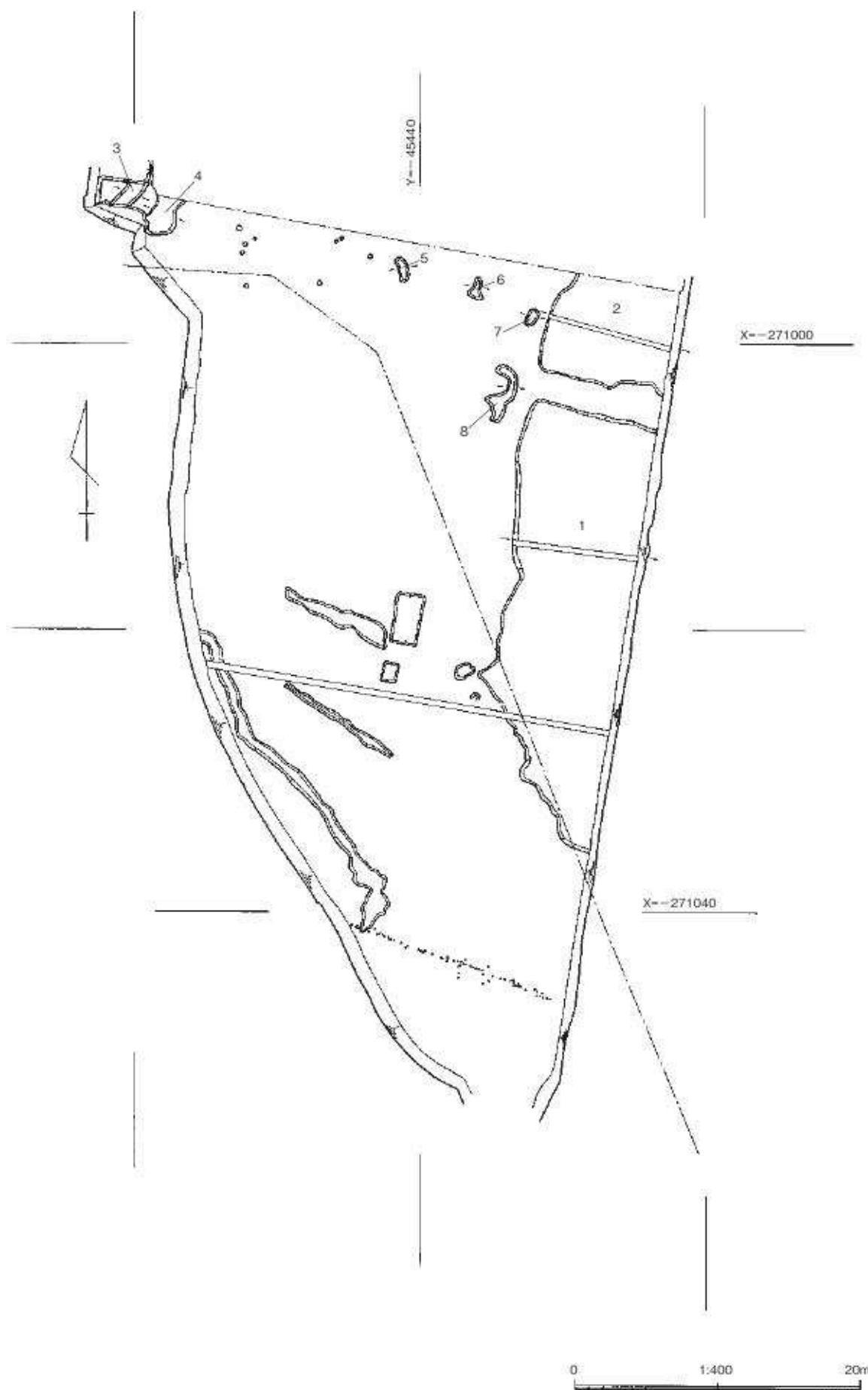


图 6 15 区上面遺構

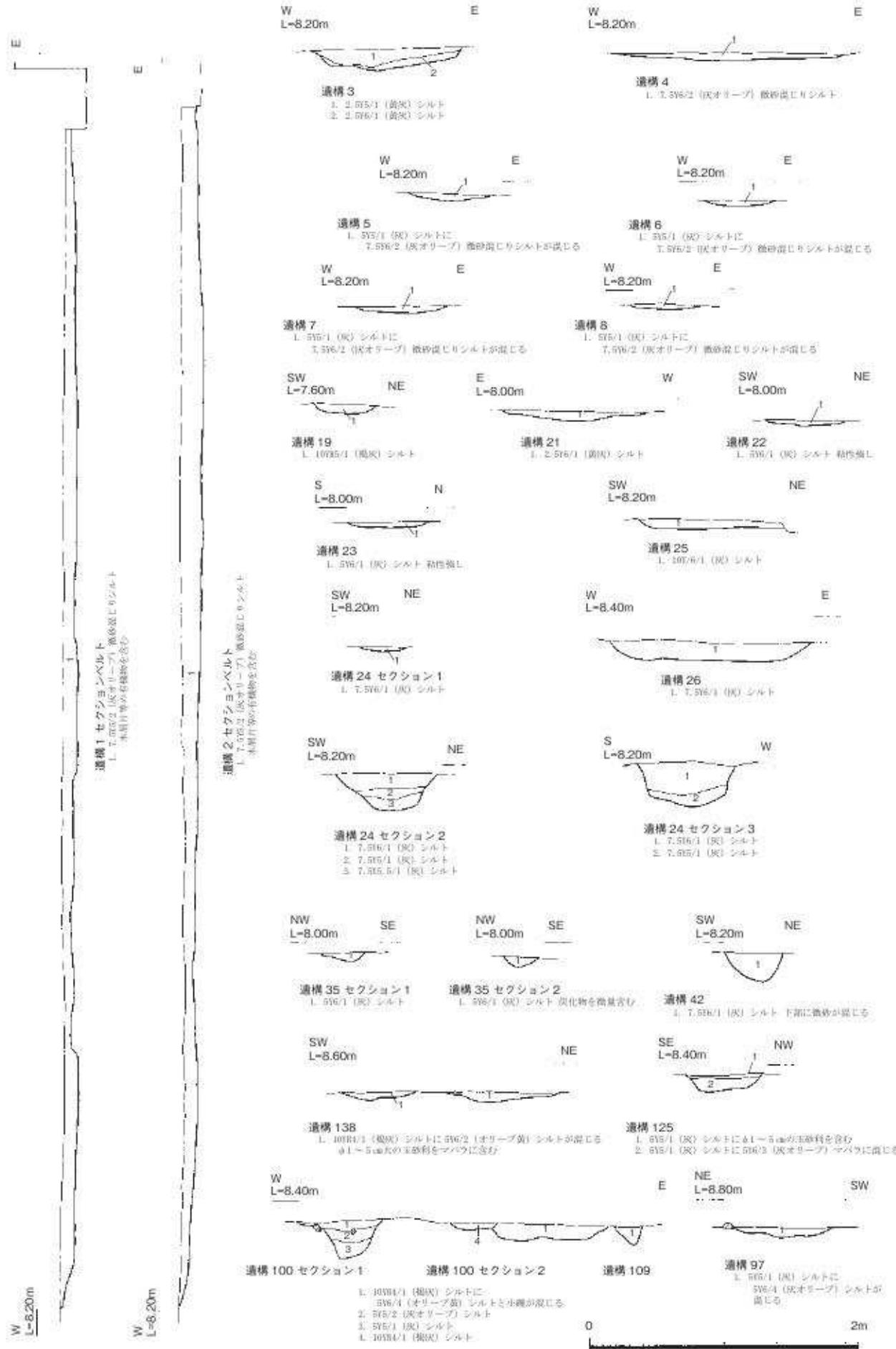


図7 15区上面・下面、14区遺構断面土層図

物は皆無である。

【14区検出遺構】(図8・9・10・11、図版4・12) 調査区の中央東寄りに南北方向の現有の水路が南流している。遺構密度は15区でもそうであったが、全体的に希薄である。特に現有水路を跨いで、南側の12・13区(近畿自動車道紀勢線調査)で検出された旧河道が本調査区でも検出された。旧河道以外の遺構が検出されたのは当地区の西側寄りである。これらの遺構には土坑状遺構、溝状遺構、掘立柱建物などがある。以下、主だった遺構について南側から順に記述する。

(遺構19)(図7、図版6) 調査区の南東隅で検出した楕円形状を呈する土坑状遺構である。規模は0.5～0.7mを測る。残存の深さは0.07mと浅い。埋土は10YR5/1(褐灰)シルトの単一層である。ここからの出土遺物は皆無である。

(遺構24)(図7、図版6) 調査地の中央西で検出した溝状遺構である。西側の調査区外から東に流れていたと考えられる。検出し得たのは約22mである。検出幅は0.5～0.8m、残存の深さは0.04～0.34mを測り、東側で浅くなり消滅する。埋土は灰色系シルトで3層に分層でき、出土遺物は皆無である。

(遺構25)(図7、図版7) 遺構24の南に接して検出した土坑状遺構である。形状は楕円形を呈し、規模は約3.0×4.0m、残存の深さは0.08mを測る。底から肩にかけ緩く立ち上り、底は平坦である。埋土は灰色シルトの単一層で、ここからの出土遺物は無い。

(遺構26)(図7、図版7) 遺構24の北側で検出した土坑状遺構である。形状は長楕円形を呈し、規模は南北長約4.0m、東西長約1.5mを測り、残存の深さは0.16mを測る。断面形状は舟底状を呈する。埋土は7.5Y6/1(灰)シルトの単一層である。ここからの出土遺物も皆無であった。

(遺構35)(図7) 調査区の南端で検出した溝状遺構である。東側は流路と重複しているが、前後関係は判然としない。流路からの派生した溝状の遺構とも考えられる。形状と底の深さから判断して東から南西方向に流れていたと考えられる。検出長は約13.0m、幅は0.25～0.35m、残存の深さは0.06～0.08mと浅い。埋土は5Y6/1(灰)シルトで、微量の炭化物を含む。この遺構からも遺物は皆無である。

(遺構42)(図7、図版7) 遺構24の南側で検出した溝状遺構である。遺構24と同様に西側は調査区外に延びている。検出長は6.5m、幅は0.3～0.4mを測る。残存の深さは最も深い中央部で0.22mを測る。断面の形状はほぼ「U」字形を呈する。埋土は7.5Y6/1(灰)シルトで、下部に微砂が混じる。出土遺物は皆無である。

(遺構43)(図9、図版7) 調査区の南西隅で検出した土坑状遺構である。形状はアメーバー状を呈する。形状から二つの遺構が重複している可能性があるが、精査を行ってもそのプランは確認できなかった。規模は約10.0×12.0m、残存の深さは最も深い箇所で0.15mを測る。底は多少の凹凸はあるものの総じて平らである。埋土は7.5Y6/1(灰)シルトの単一層で、所々に微差を含む。この遺構からの出土遺物は皆無である。

(遺構100・109)(図7) 調査区のほぼ中央部で検出した溝状遺構である。西側(100)と北側(109)から流れてきた溝が結合し一体となり南に流れる。また、遺構100と遺構109は旧河道と重複するため北側については検出できていない。旧河道との一部分の重複関係からは旧河道より新しい溝であると判断できる。検出し得た長さは、遺構100が約16m、遺構109が17mである。幅は遺構100が1.4m、遺構109は約0.65mを測る。残存の深さは遺構100が0.27m、遺構109が0.14m

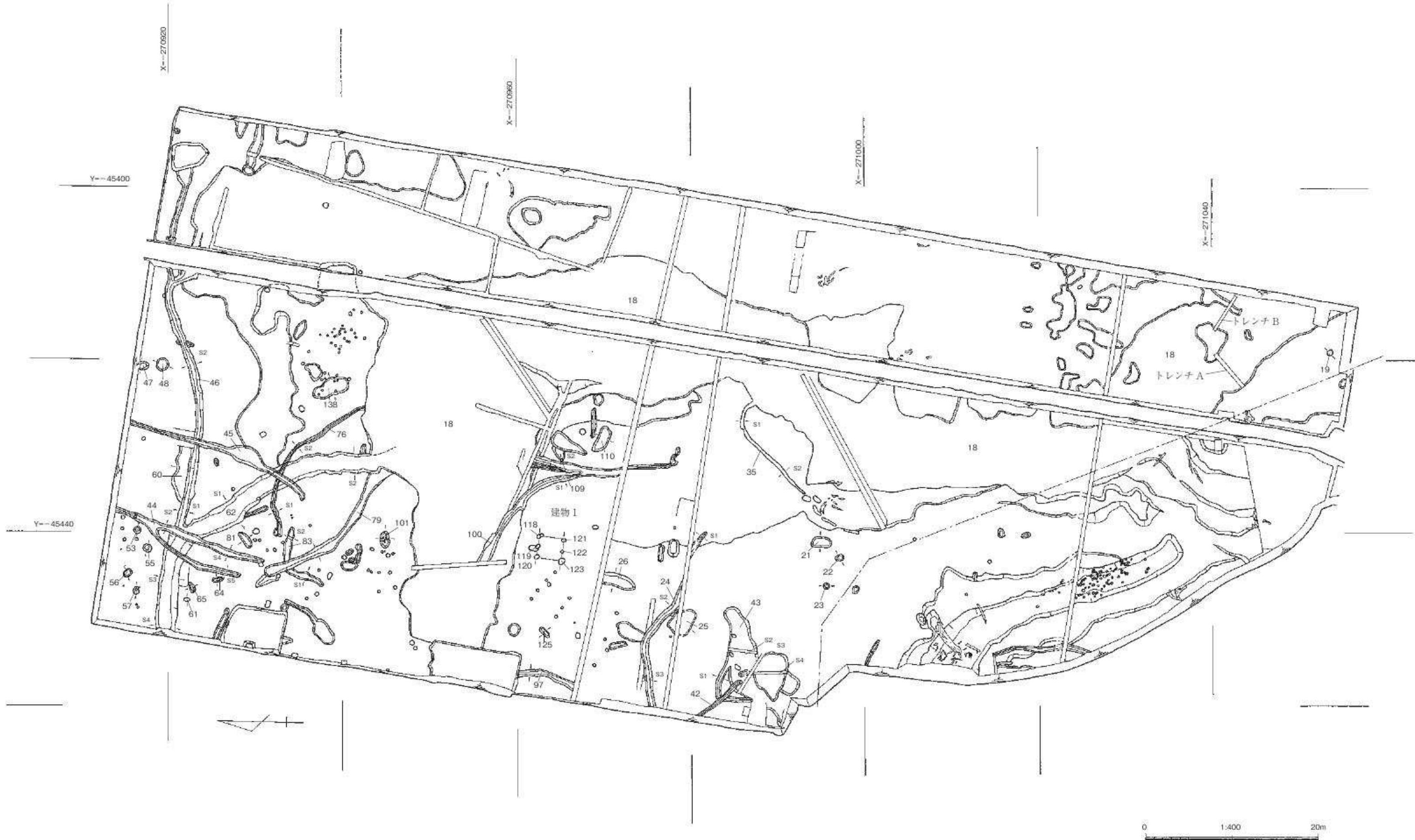


図8 14区・15区下面遺構

を測る。断面形状は遺構 100 がほぼ台形を呈する。遺構 100 の埋土は上層が 10YR4/1（褐灰）シルトで、それから下層は、灰色系のシルトで 2 層に分層できる。ここからの出土遺物には弥生土器細片の他、台石と考えられる石片が 1 片ある。

(遺構 97) (図 7、図版 11) 調査区中央西端で検出した南北方向の溝で、北側は搅乱され不明となり、約 6.5 m を検出した。検出した幅は 0.5 ~ 0.75 m、残存の深さは 0.09 m を測る。埋土は灰色系シルトの單一層である。この遺構からは弥生時代後期と考えられる土器の細片が十数片出土した。

(遺構 125) (図 7、図版 11) 遺構 97 の東に隣接して検出した土坑状遺構である。形状は長楕円形を呈し、規模は約 0.55×1.70 m を測る。残存の深さは 0.10 ~ 0.14 m を測る。断面形状は舟形を呈し、埋土は灰色系シルトで 2 層に分層できる。ここからの出土遺物は皆無であった。

(遺構 138) (図 7、図版 11) 調査区中央北寄りの微高地上で検出した土坑状遺構である。形状はアメーバー状を呈し、中央は後世の削平によるものか、埋土が無い状況となる。規模は約 1.6×4.3 m、残存の深さは 0.08 m を測り、埋土は單一層で、褐灰色と黄色系のシルトの混層に割合大きい玉砂利を含む。出土遺物は皆無である。

(遺構 110) (図 9、図版 11) 遺構 100 の東側で検出した楕円形を呈する土坑状遺構である。規模は 1.3×3.4 m で、残存の深さは 0.08 m を測る。埋土は灰色シルトに黄色系シルトが混ざった單一層である。遺物は弥生土器片が数片出土している。

(遺構 53・55 ~ 57・61・64・65) (図 9、図版 8 ~ 10) 調査区北西隅で検出した土坑群である。これら 7 基の土坑状遺構の大きさは 0.4 ~ 1.6 m 内に納まるものである。形状は、遺構 57 が円形を呈し、それ以外は楕円形を呈する。残存の深さは、遺構 53・55・57 については約 0.2 ~ 0.3 m を測り、他の遺構は 0.04 ~ 0.07 m と遺存状態が良好でない。この内、出土遺物が認められたのは遺構 53・55・57 の遺存状態がやや良好な遺構である。これらの遺構については、規模や形状から土坑墓の可能性も考えられる。遺物は、遺構 53 は細片 1、遺構 55 も細片 1、遺構 57 は細片 5 が出土したが、何れも細片のため時期については断定できない。

(遺構 60) (図 9、図版 9) 遺構 46 (溝状遺構) と重複する土坑状遺構である。規模は南北長約 1.7 m 以上、東西長約 6.2 m を測る。残存の深さは 0.06 m と非常に浅い。埋土は灰色シルトに黄色シルトが微量に混ざる單一層である。ここからは弥生時代前期と考えられる破片が 10 片出土した。

(遺構 81) (図 9、図版 10) 調査区北西隅土坑群のやや南東で検出した。形状は長楕円形を呈し、規模は 0.7×2.2 m、残存の深さは 0.05 m を測る。埋土は灰色シルトに浅黄色シルトが疎らに混じり、玉砂利も疎らに入る。ここからの出土遺物は皆無である。

(遺構 47・48) (図 9、図版 8) 調査区北端中央で検出した土坑状遺構である。遺構 47 の北側は調査区外にかかり全容は不明である。形状は長楕円形を呈すると思われる。規模は 0.8×1.4 m 以上で、残存の深さは 0.34m を測る。遺構 48 の形状は楕円形を呈し、規模は 1.0×1.4 m、残存の深さは 0.12m を測る。埋土は双方ともに少量礫を含む灰色系シルトの單一層である。遺構 48 からは弥生土器と考えられる細片が 8 片出土している。遺構 47 の出土遺物は皆無である。

(遺構 76・79) (図 9、図版 10) 調査区の中央西寄りで検出した溝状遺構である。これら 2 条の溝は北西方向から南東方向に流れていたと考えられる。南東は旧河道 (遺構 18) と重複するため全容は明らかでない。旧河道との新旧関係については、調査時に旧河道が埋没してから 2 条の溝が流れたものと判断した。遺構 76 は 20.8 m を検出した。幅は約 0.3 ~ 0.5 m、残存の深さ

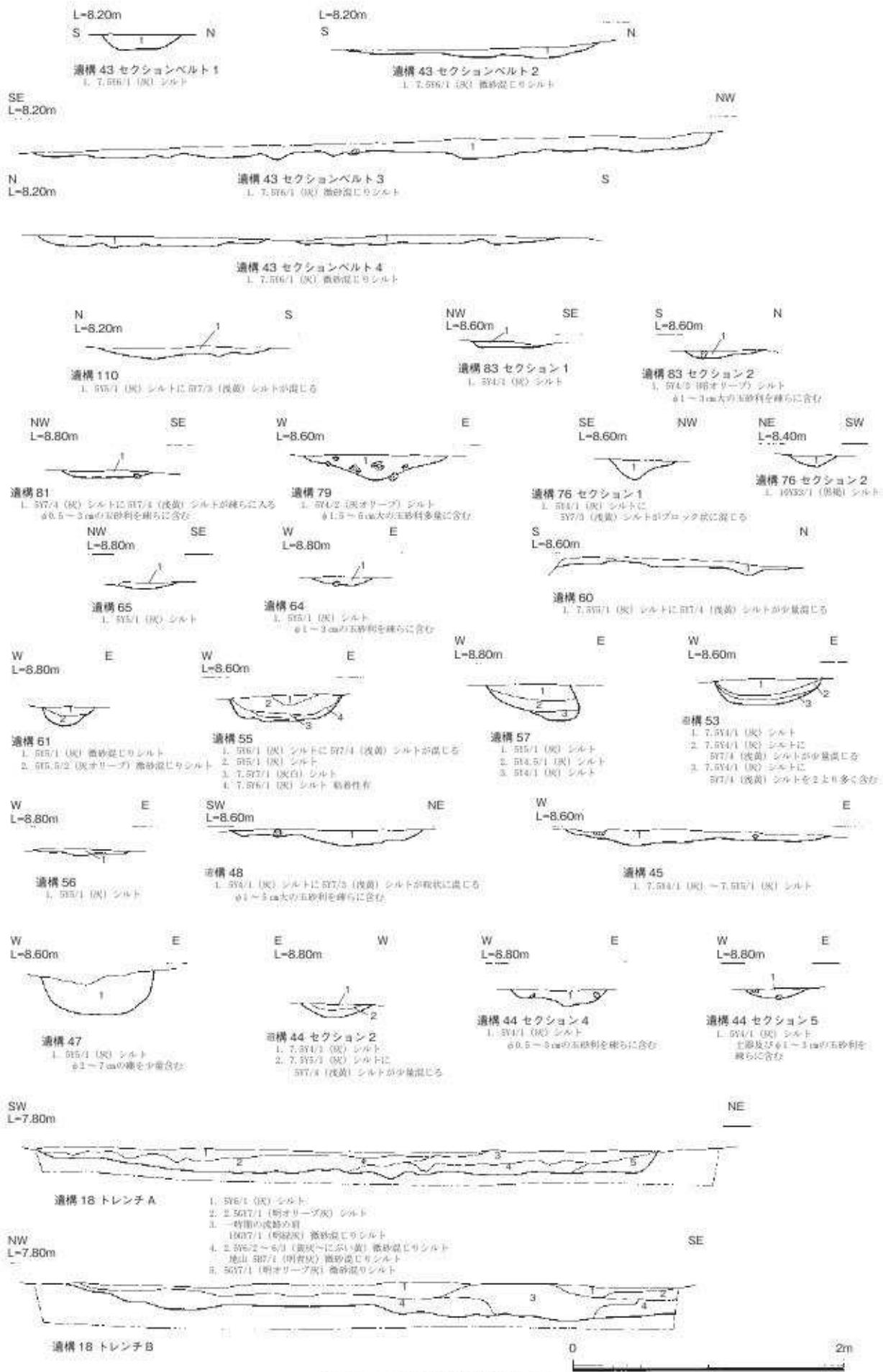


図 9 14 区遺構断面土層図 1

は0.16mを測る。埋土は灰色シルトに浅黄色のシルトがブロック状に混ざる單一層である。ここからは弥生土器片と考えられる土器細片10片が出土している。遺構79は19.5mを検出した。幅は0.7~1.5m、残存の深さは約0.2mを測る。埋土は灰色系シルトに玉砂利を多量に含む。この溝からは石斧(図14の42)が一点のみ出土したが、他の遺物は皆無であった。

(遺構83)(図9、図版10) 遺構79の溝と重複し、遺構79より古い。形状は「く」の字状を呈し、先端と末尾は自然消滅している。検出長は10.4m、幅は0.5~1.0m、残存の深さは0.06mを測る。埋土は灰色系シルトに玉砂利を少量含む。遺物は弥生土器と考えられる破片が17片出土した。

(遺構44・45)(図9、図版7・8) 調査区の北西済みで検出した2条の溝状遺構である。北側は調査区外のため不明となる。双方の溝は南北方向に延びているが、底の高さから判断すると北に流れていたと考えられる。形状から推量するに、西あるいは南西の微高地から北方向もしくは北東方向に流れていたものと思われる。遺構44の検出長は約18.5m、幅は0.5~0.7m、残存の深さは0.1~0.14mを測る。埋土は2層に分層できる箇所と單一層の箇所があるが、概ね灰色系シルトとなる。ここからの遺物には弥生土器甕底部(図13の25)、弥生土器ミニチュア壺(図13の26)、他に小片、細片を合わせて弥生土器片が約70片余り出土している。出土遺物から弥生時代後期の溝と考えられる。遺構45は約22mを検出した。幅は0.5~1.8m、残存の深さは0.12mを測る。埋土は灰色系シルトとなる。遺物は弥生土器片1、須恵器片1が出土している。出土遺物から古墳時代と考えられる。

(遺構46)(図10、図版8) 調査区の北端で検出された東西方向の溝状遺構である。この遺構の西側12mは遺構62と重複し、西側の埋土については底の堆積層だけが遺存している。溝底の高さから判断して、西の微高地から東に流れていたと考えられる。検出長は約56.0m、幅は0.8~3.1m、残存の深さは0.33~0.44mを測る。断面形状はしっかりととした「V」字あるいは「U」字形を呈し、人為的に掘削された可能性が大である。埋土は西側重複部分の底の堆積層については、N5/0(灰)粘性の強いシルト、東側の上層は黄灰系シルト、下層は灰色シルトとなる。この溝状遺構からは弥生土器壺の底部(図13の27)、他に弥生土器細片、小片が一定量出土し、石製品の剥片(頁岩)も少量出土した。出土遺物から、この溝状遺構の時期は弥生時代中期前葉と考えられる。

(遺構62)(図10、図版9) 調査区北西隅で検出した溝状遺構である。調査区外の西方向から北東

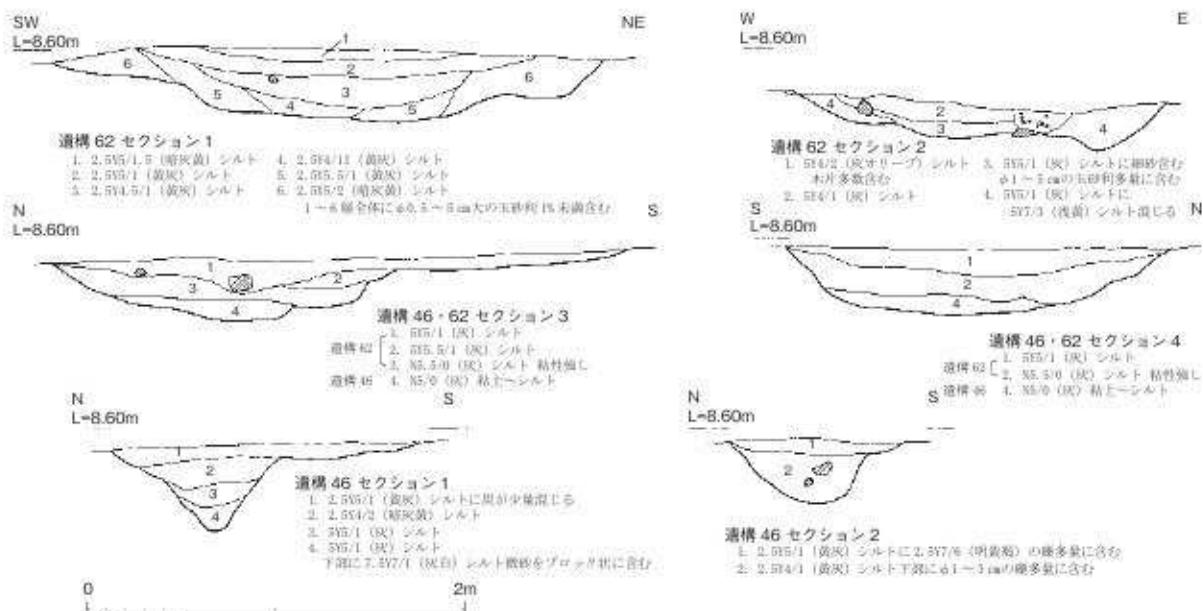


図10 14区遺構断面土層図2

方向に延び、旧河道と重複する。調査時に旧河道上でプラン確認をおこなったが、前後関係は不明である。旧河道に流れ込んで一体となる可能性も考えられる。また、西側は遺構 46 と全く重複し、調査区外の西から遺構 46 の水道を踏襲し流れていたと思われる。検出長は約 36.0 m、幅は約 2.0 ~ 3.0 m、残存の深さは最も深い箇所で 0.36 m を測る。断面形は、底は割合に平らで肩口にかけて緩

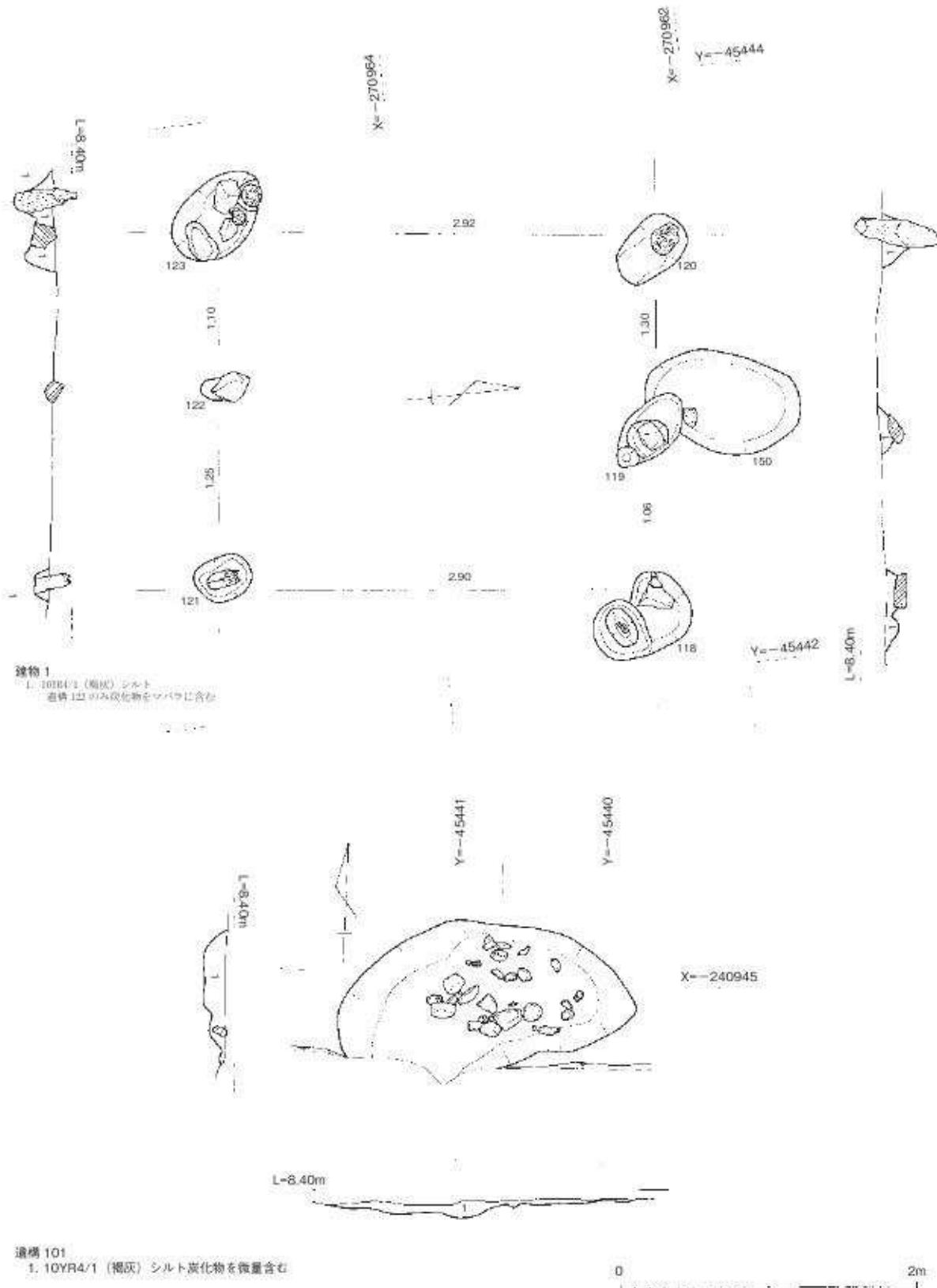


図 11 堀立柱建物・遺構 101 実測図

やかに立ち上がる。埋土は全体に黄灰色系シルトで、レンズ状に堆積し、6層に細分できる。この溝からの遺物には弥生土器甕（図13の19～21）・高杯（図13の22～24）、台石（図15の52）があり、他にも一定量の土器の破片が出土している。出土遺物から弥生時代終末期の溝状遺構と考えられる。

（遺構18）（図9、図版5）全調査区に渡って検出された旧河道（流路）である。この旧河道は、調査地の全域に網の目状に流れていたことが今回の調査により判明した。地形的な観点から、概ね北方向から南方向に流れていたと考えられ、特に調査区の中央部を流れる。調査区の中央部には現有の水路が掘削されており、流れを踏襲している可能性が大である。流路の幅は約12.0～20.0mを測り、残存の深さは、トレーニングおよび下層確認トレーニングを設定した箇所では約0.15～0.3mを測る。埋土は5層に分層でき、上層は灰色系のしると、下層は明緑灰～黄灰の微砂混じりシルトとなる。但し、この旧河道の規模は、一時期のものである。また、下層確認トレーニング（図版16）では砂層（細砂・粗砂）および礫層（径3～15cm大）の無遺物堆積層となり、有史以前は、調査地全体が谷状地形となっていたことが窺える。旧河道からは弥生土器片、須恵器片、瓦器碗片（図13の30）、搔器（図14の43・44）などが出土している。

（遺構101）（図11、図版13）調査区北西の微高地上で検出した土坑状遺構である。形状は長楕円形を呈し、主軸を東西とする。規模は東西長約2.0m、南北長約1.0m、残存の深さは最も深い中央部で0.16mを測る。断面形は「逆台形」状を呈する。埋土は褐灰色シルトの単一層で、炭化物を微量に含む。底には石鏃（図14の33）が1点、礫石器（図15の45～50）が6点密集して出土した。また、埋土からは微量の骨片が出土した。他の出土遺物には弥生時代中期の土器細片、小片が約70片、石器石材剥片（頁岩）が4点出土した。以上の状況から判断して弥生時代中期の土坑墓と考えられる。

（掘立柱建物）（図11、図版14）調査区中央西側で検出した。南北棟の建物である。規模は南北1間（間尺2.90m）×東西2間（南側、東から間尺1.25m・1.10m）の小規模な建物である。柱穴の掘形は楕円形を呈し、規模は約0.4～0.7m、残存の深さは0.08～0.22mを測る。遺構120・121・123の柱穴には太さ0.12～0.16mの柱根が遺存していた。遺構119と遺構122は棟持柱と考えられ、礎石のみ遺存していた。遺構123の柱穴掘形から須恵器杯身（図13の29）が出土していることから、7世紀代の建物と考えられる。

第3節 遺物

今回の調査で出土した遺物は、調査面積の割には少量である。この様な結果となった要因は、調査区全域に旧河道（遺構18）が巡っていたことにあると考えられる。調査範囲の中央東寄りを現有の水路が北から南に流れしており、概ね、この水路を跨いで旧河道を検出した。

この旧河道からの出土量は微量で、遺物の殆どは細片であった。その中でも弥生土器片が最も多く、打製石器（図14の43・44）、あるいは石器剥片も少量ながら出土した。他には古墳時代と考えられる須恵器甕片、古代の土師器片、中世の瓦器碗片（図13の30）なども出土している。

出土遺物の中で、包含層からの出土量が最も多い。時期的には弥生時代中期初頭から近世までの遺物が出土した。図示できるものが少なく、破片ながら図12に土器、図14の31～40に打製石器、図15の51に礫石器を掲載した。第3層からの図示できる遺物はなかったが、肥前系磁器や土師器、中国製青磁片が出土している。第4層からは弥生時代中期（2）や終末期（1）、飛

鳥から奈良時代の須恵器（3～6）、古代の黒色土器（7）、土師器椀（8）、中世中国製白磁（9）などの時期幅のある遺物が出土していることから、古代から中世前半の時期に土地改変がなされたことが窺えられる。第5層には弥生土器（10～14）、古代の須恵器（16・17）、古代の土師器椀（15）がみうけられ、古墳時代から古代の時期が妥当と考えられる。第6層には搬入品と考えられる弥

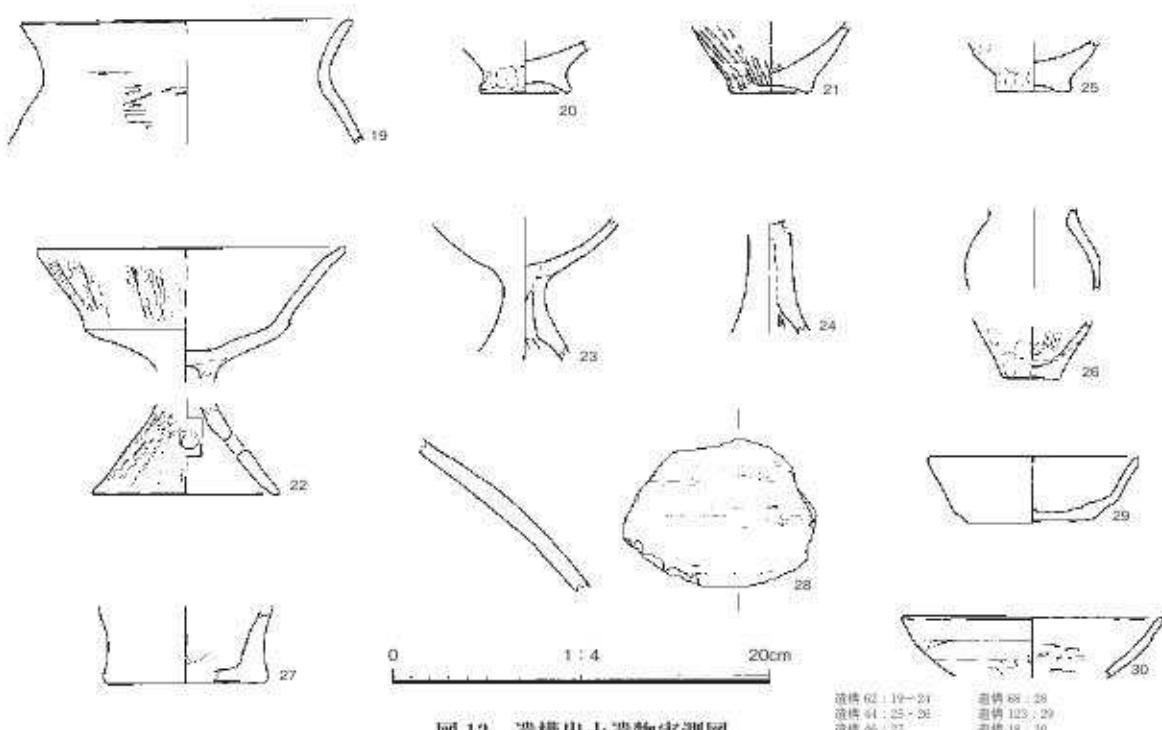
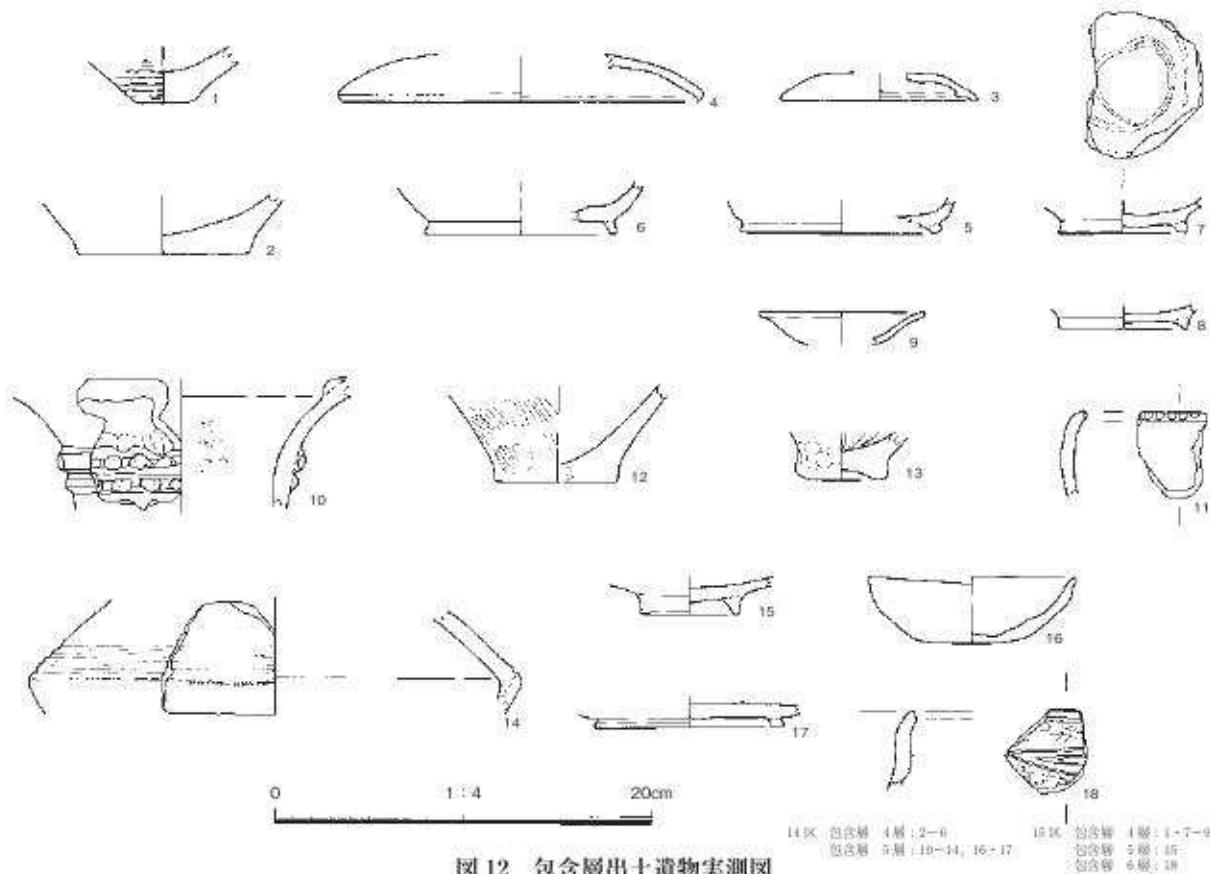


図 13 遺構出土遺物実測図

生時代前期の浮線文土器片が出土した。浮線文土器はみなペインターチェンジ建設に伴う調査時にも出土しており和歌山では稀である。(注3)

遺構からの出土遺物については、「遺構」の項で触れたので省略する。打製石器も一定量が出土している。弥生時代前期・中期に帰属するものと思われる。材質は地元産の頁岩である。

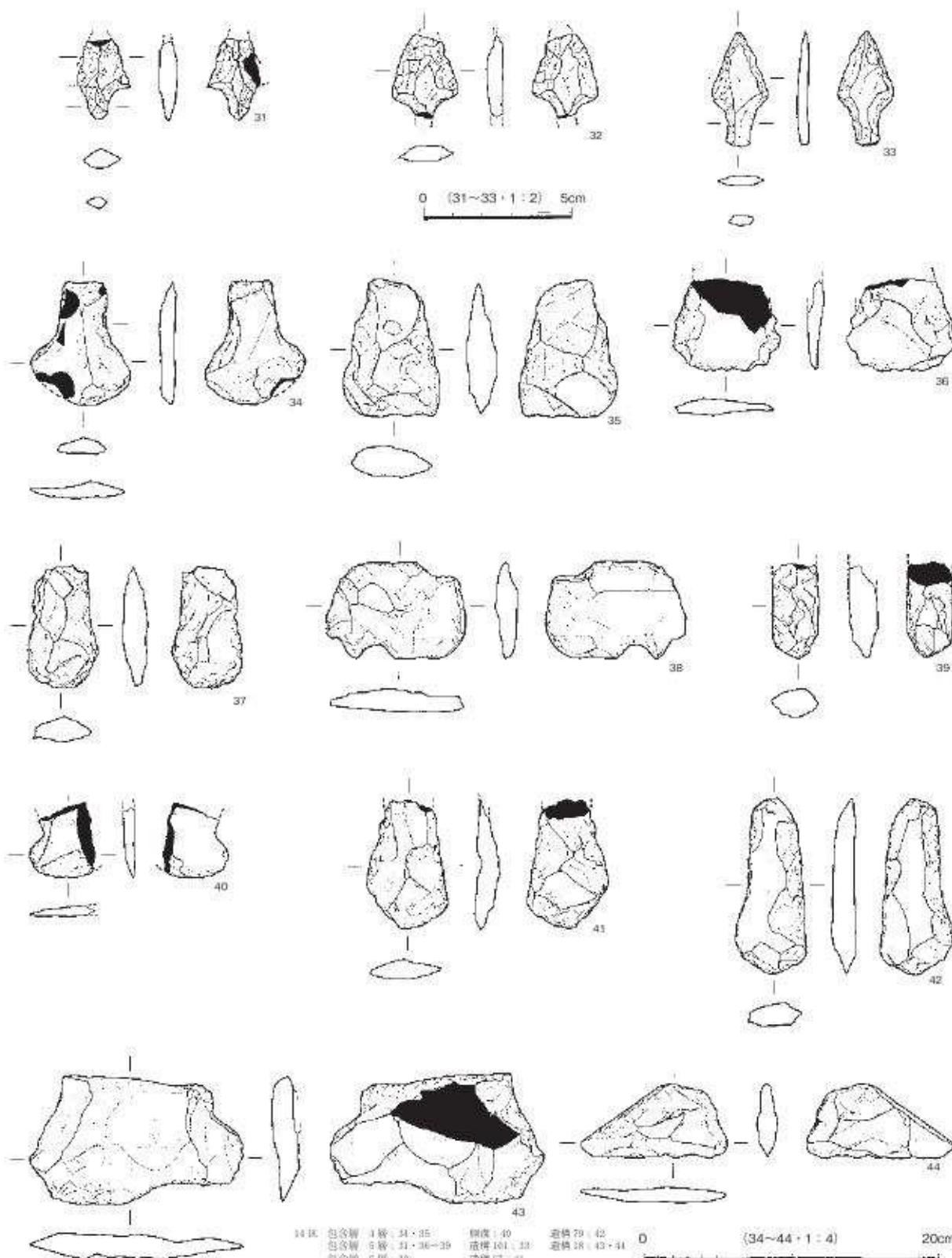


図 14 包含層及び遺構出土の打製石器実測図

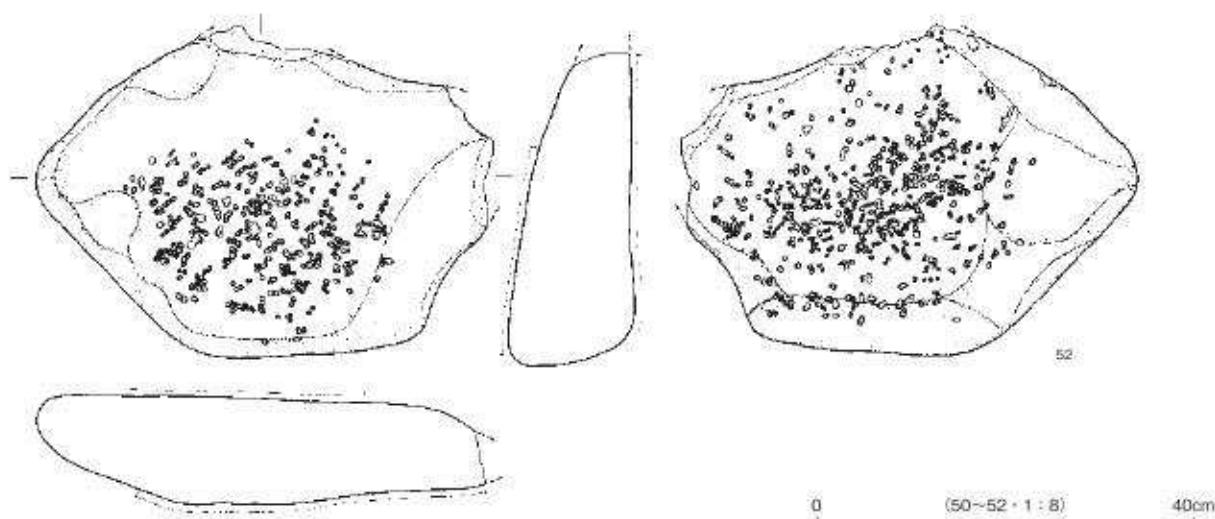
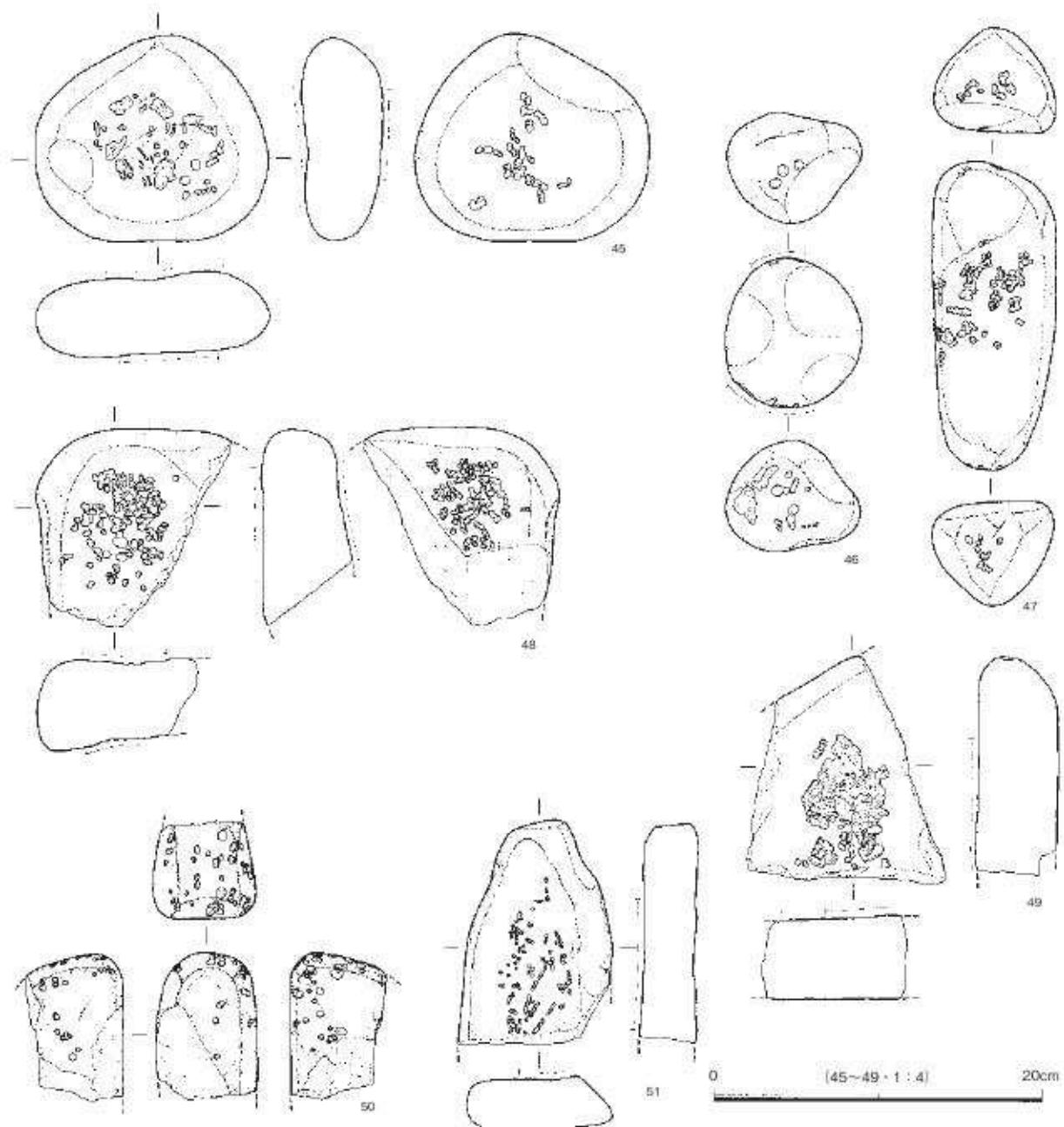


図 15 包含層及び遺構出土の礫石器実測図
14.IX-包含層 4層:50 遺構 101:45-50
遺構 62:52

第V章 まとめ

今回の調査地を概観してみると、東と西に山裾が迫る谷状地形で、その中央部は水田で、北から南に向かって低い壇状となっている。また、水田の両外は微高地となり人家が点在する。

調査地は水田部分に当たり、谷状地形の最も低い箇所であったため遺構密度は希薄であった。

調査地の南半部および北半部の東側については明瞭な遺構は検出されず、旧河道（自然流路）が網の目状に北から南西方向に流れていたことを確認した。

最も遺構が集中していたのは調査地の西側で、低地から山裾の微高地部分への変換点に当たると考えられる。北西隅の箇所では、断面形状から推察するに人工的に掘削されたと思われる溝状遺構（遺構 46）を検出した。出土遺物から弥生時代中期と考えられる土器破片が出土している。また、調査地中央部で検出した溝状遺構（遺構 24）も断面形状を観察すると人力により掘削された可能性が高い。以上の状況から、双方ともに西側の微高地上の居住域からの水の始末を考えたものか、あるいは水稻耕作の用水目的として掘削されたものと思われる。土坑墓とした遺構 101 からは骨片と石鏃、礫石器が纏まって出土した。土器片も細片が微量出土したが時期決定には至る資料ではない。出土した石器類から判断して弥生時代前期あるいは中期の時期が考えられる。

また、平成 22 年度の調査において、本調査地の南南西約 100m の地点で弥生時代前期の木製品の工房跡と考えられる場所が発見されていることや、今回の調査成果から、調査地の微高地上一帯に人が定住し始めたのは弥生時代前期と思われる。

表2 石器遺物観察表

報告書番号	種類	調査区地名	遺構位置	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重さ g	石材	残存率 %	備考
31	石鏃	14 E10k6	第5層	29以上	22	0.5	351以上	頁岩	80%	凸基有茎式、先端欠損、側面一部欠損
32	石鏃	14 E11d3	第6層	29以上	18以上	0.6	256以上	頁岩	90%	凸基有茎式、先端欠損、茎部先端欠損
33	石鏃	14 E10k12	101	3.9	1.9	0.3	242	頁岩	100%	凸基有茎式、側面中央自然面利用
34	打製石斧	14 E10k19	第4層	8.3	6.8	1.1	53.84以上	頁岩	90%	片刃部欠損
35	打製石斧	14 E10j7	第4層	9.3	6.6	2.0	131.03	頁岩	100%	基部欠損
36	打製石斧	14 E10e5	第5層	6.2以上	7.3以上	1.1	54.15以上	頁岩	50%	基部欠損
37	打製石斧	14 E10d6	第5層	8.2	4.8	1.7	67.96以上	頁岩	100%	刃部先端に使用痕
38	磨形石器	14 E10e6	第5層	6.5	9.5	1.5	111.58	頁岩	100%	階段状剥離
39	打製石剣	14 E10e6	第5層	6.4以上	3.2	1.9	51.12以上	頁岩	不明	残存しているのは基部と思われる。
40	搔器	14 E10e6	側溝	5.0以上	4.4以上	0.6	18.45以上	頁岩	不明	片面自然面利用
41	打製石斧	14 E10f89	67	8.6以上	5.5	1.3	73.07以上	頁岩	85%	基部欠損 階段状剥離
42	打製石斧	14 E10k9	79	11.9	4.8	1.4	108.94	頁岩	100%	片面刃部先端使用痕時に欠損か？
43	搔器	14 E10d20	18	8.7	14.5	1.6	282.98以上	頁岩	95%	片面自然面利用
44	矮器	15 E11g3	18	5.0	10.0	1.3	62.45	頁岩	100%	刃部先端に調整痕
45	凹石	14 E10k12	101	12.6	14.3	4.4	1240.19	砂岩	100%	片面中央にヒト剥離 3辺に敲打痕
46	敲打痕	14 E10k2	101	9.2	8.3	6.7	582.75	砂岩	100%	頂点およびその外縁に 敲打痕
47	敲打痕	14 E10k12	101	18.8	7.4	6.3	1172.44	砂岩	100%	肉光端および上面に 敲打痕
48	敲打痕	14 E10k12	101	12.0	12.0	4.6	898.06以上	砂岩	100%	肉面が敲打痕のため やや歪む
49	敲打痕	14 E10k12	101	13.8	12.1	4.9	1066.16以上	砂岩	95%	片面敲打痕
50	台石	14 E10k12	101	17.8以上	12.6	11.7	3755以上	砂岩	不明	欠損、片面摩擦痕に よりフルフル
51	台石	14 E10j7	第4層	27.2以上	18.8	6.1	4600以上	砂岩	不明	片面の中央部の殆どに 敲打痕
52	台石	14 E10a8	62	35.0以上	48.6以上	13.5	26300以上	砂岩	95%	両面中央部に敲打痕

注1「立野道路」—近畿自働車道紅葉線事業に伴う発掘調査報告書—2013年3月 公益財團法人 和歌山県文化財センター

注2「立野道路」—近畿自働車道松原那智勝浦線すみ西インター（仮称）事業に伴う発掘調査報告書—2014年3月 公益財團法人 和歌山県文化財センター

注3「熊藏地区道路」—近畿自働車道松原那智勝浦線（御坊—南部）建設に伴う発掘調査報告書—2005年3月 財團法人 和歌山県文化財センター



1. 15 区上面 (写真手前)
全景 (北上空から)



2. 15 区上面 (写真中央)
全景 (南上空から)



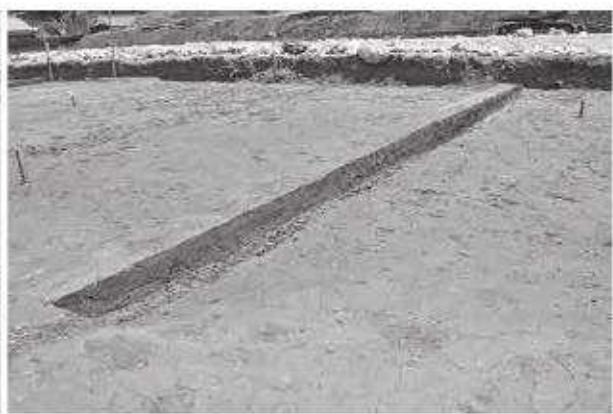
3. 15 区上面全景
(上空から)



1. 15 区上面全景（北から）



2. 15 区上面遺構 1（北から）



3. 15 区上面遺構 1 断割り状況（南西から）



4. 15 区上面遺構 2（北から）



5. 15 区上面遺構 2 断割り状況（南西から）



6. 15 区上面遺構 5 ~ 8（北から）



7. 15 区上面遺構 3 · 4 · 9 ~ 17（北東から）

図版 3



1. 15 区遺構 3 土層堆積状況（南から）



2. 15 区遺構 4 土層堆積状況（南から）



3. 15 区遺構 5 土層堆積状況（南から）



4. 15 区遺構 6 土層堆積状況（南から）



5. 15 区遺構 7 土層堆積状況（南から）



6. 15 区遺構 8 土層堆積状況（南から）



7. 14 区南側・15 区全景（南東上空から）

図版 4



1. 14 区南側・15 区全景
(北から)



2. 14 区・15 区西侧全景
(北から)



3. 14 区・15 区東側全景
(北西上空から)



1. 14 区遺構 18 トレンチ
A 土層堆積状況 (東から)



2. 14 区遺構 18 トレンチ
B 土層堆積状況 (南から)



3. 14 区遺構 18 トレンチ
C 土層堆積状況 (北西から)

図版 6



1. 14 区遺構 19 土層堆積状況（南東から）



2. 15 区遺構 21 完掘状況（北から）



左上

3. 15 区遺構 22 土層堆積状況（南東から）

上

4. 15 区遺構 23 完掘状況（東から）

左

5. 14 区遺構 24 セクション 1 土層堆積状況（南東から）



6. 14 区遺構 24 セクション 2 土層堆積状況（南東から）



7. 14 区遺構 24 セクション 3 土層堆積状況（東から）



1. 14 区遺構 25 土層堆積状況（東から）



2. 14 区遺構 26 土層堆積状況（南から）



3. 14 区遺構 42 土層堆積状況（南東から）



4. 14 区遺構 43 セクション 1 土層堆積状況（東から）



5. 14 区遺構 43 セクション 4 土層堆積状況（南西から）



6. 14 区遺構 44 セクション 1 土層堆積状況（南から）



7. (上) 14 区遺構 44 セクション 2 土層堆積状況（北から）、
8. (下) 14 区遺構 44 セクション 4 土層堆積状況（南から）



9. (上) 14 区遺構 44 セクション 3 土層堆積状況（北から）、
10. (下) 14 区遺構 44 セクション 5 土層堆積状況（南から）

図版 8



1. 14 区遺構 45 土層堆積状況（南から）



2. 14 区遺構 46 セクション 1 土層堆積状況（西から）



3. 14 区遺構 46 セクション 2 土層堆積状況（西から）



4. 14 区遺構 46 セクション 3 土層堆積状況（西から）



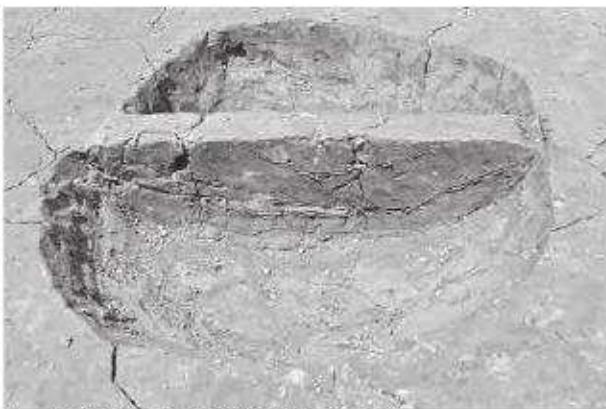
5. 14 区遺構 46 セクション 4 土層堆積状況（東から）



6. 14 区遺構 47 土層堆積状況（南から）



7. 14 区遺構 53 土層堆積状況（南から）



8. 14 区遺構 55 土層堆積状況（南から）



1. 14 区遺構 56 土層堆積状況（南から）



2. 14 区遺構 57 土層堆積状況（南から）



3. 14 区遺構 60 土層堆積状況（東から）



4. 14 区遺構 61 土層堆積状況（南から）



5. 14 区遺構 62 セクション 2 土層堆積状況（南から）



6. 14 区遺構 62 台石出土状況



7. 14 区遺構 62 セクション 1 土層堆積状況（南東から）

図版 10



1. 14 区遺構 64 土層堆積状況（南から）



2. 14 区遺構 65 土層堆積状況（南西から）



3. 14 区遺構 76 セクション 1 土層堆積状況（東から）



4. 14 区遺構 76 セクション 2 土層堆積状況（北西から）



5. 14 区遺構 79 土層堆積状況（南から）



6. 14 区遺構 81 土層堆積状況（南西から）



7. 14 区遺構 83 セクション 1 土層堆積状況（東から）



8. 14 区遺構 83 セクション 2 土層堆積状況（南から）



1. 14 区遺構 97 土層堆積状況（北から）



2. 14 区遺構 100 セクション 1 土層堆積状況（南から）



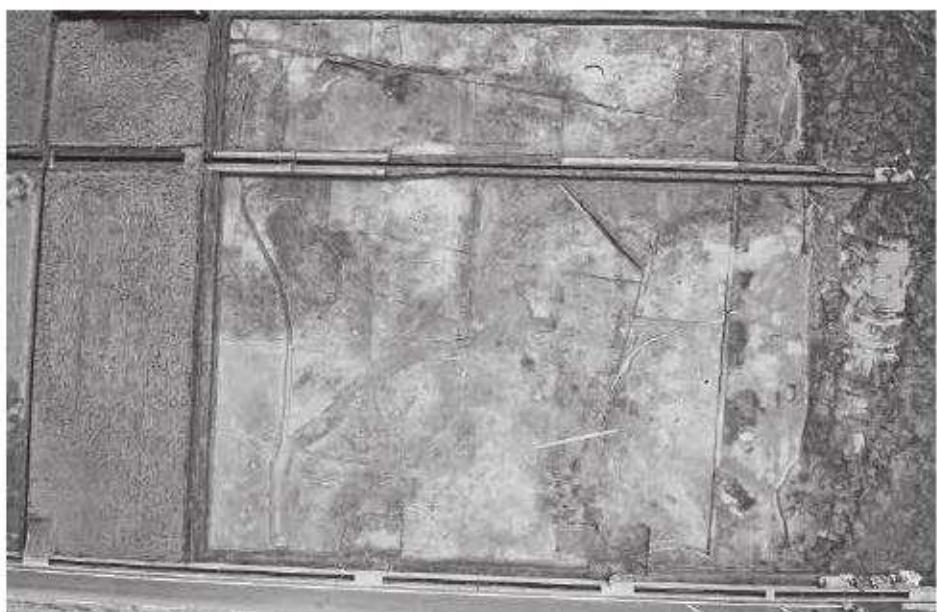
3. 14 区遺構 110 土層堆積状況（北西から）



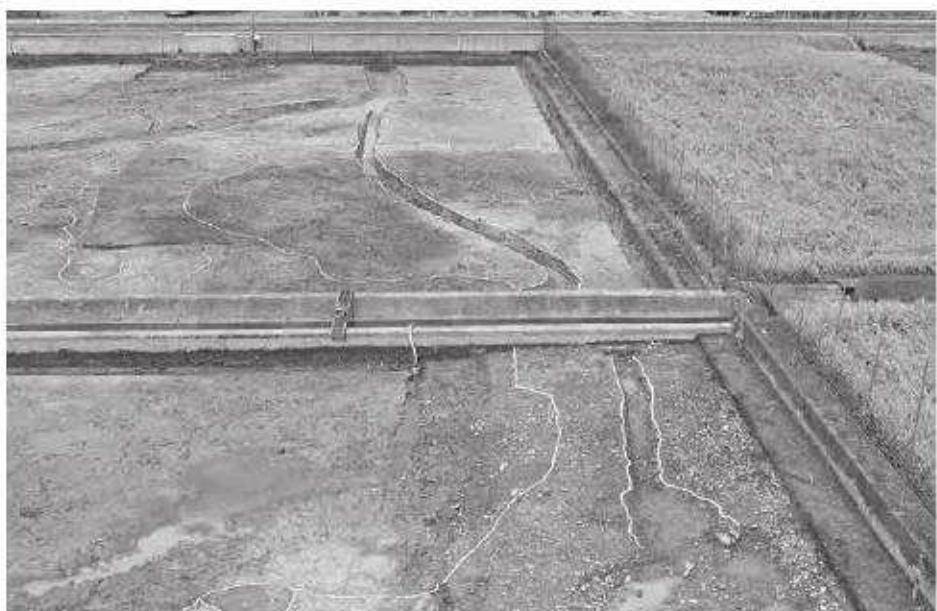
4. 14 区遺構 138 土層堆積状況（南東から）



1. 14 区北側全景
(南上空から)



2. 14 区北側全景
(上空から)



3. 14 区北端
(遺構 46・62)
(東から)



上

1. 14 区遺構 101 遺物出土状況（北西から）

中

2. 14 区遺構 101 遺物出土状況（西から）

下

3. 14 区遺構 101 石鐵出土状況（俯瞰）



右上

4. 14 区遺構 101 土層堆積状況（南から）

左下

5. 14 区遺構 101 内出土遺物（写真1のアップ）

右下

6. 14 区遺構 101 土層堆積状況（西から）





1. 14 区建物 1 全景
(南から)



2. 14 区建物 1 全景
(北から)



上
3. 14 区建物 1 遺構 120 断割状況 (北から)
右上
4. 14 区建物 1 遺構 121 断割状況 (南から)
右下
5. 14 区建物 1 遺構 123 断割状況 (南から)



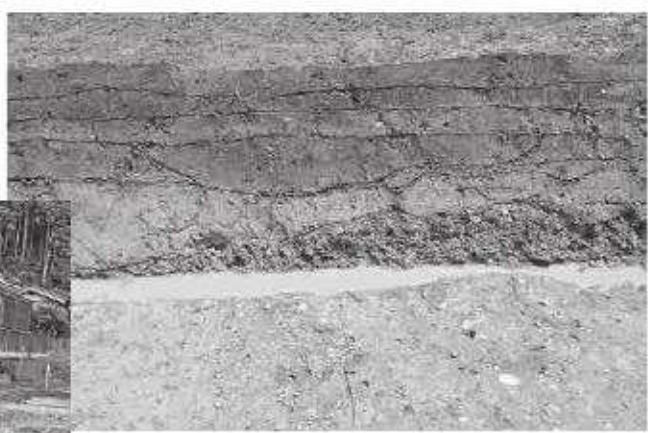


1. 14 区西壁土層堆積状況
(北から)



2. 14 区東壁土層堆積状況
(北から)

3. 14 区北壁（遺構 120 付近）
土層堆積状況（南から）

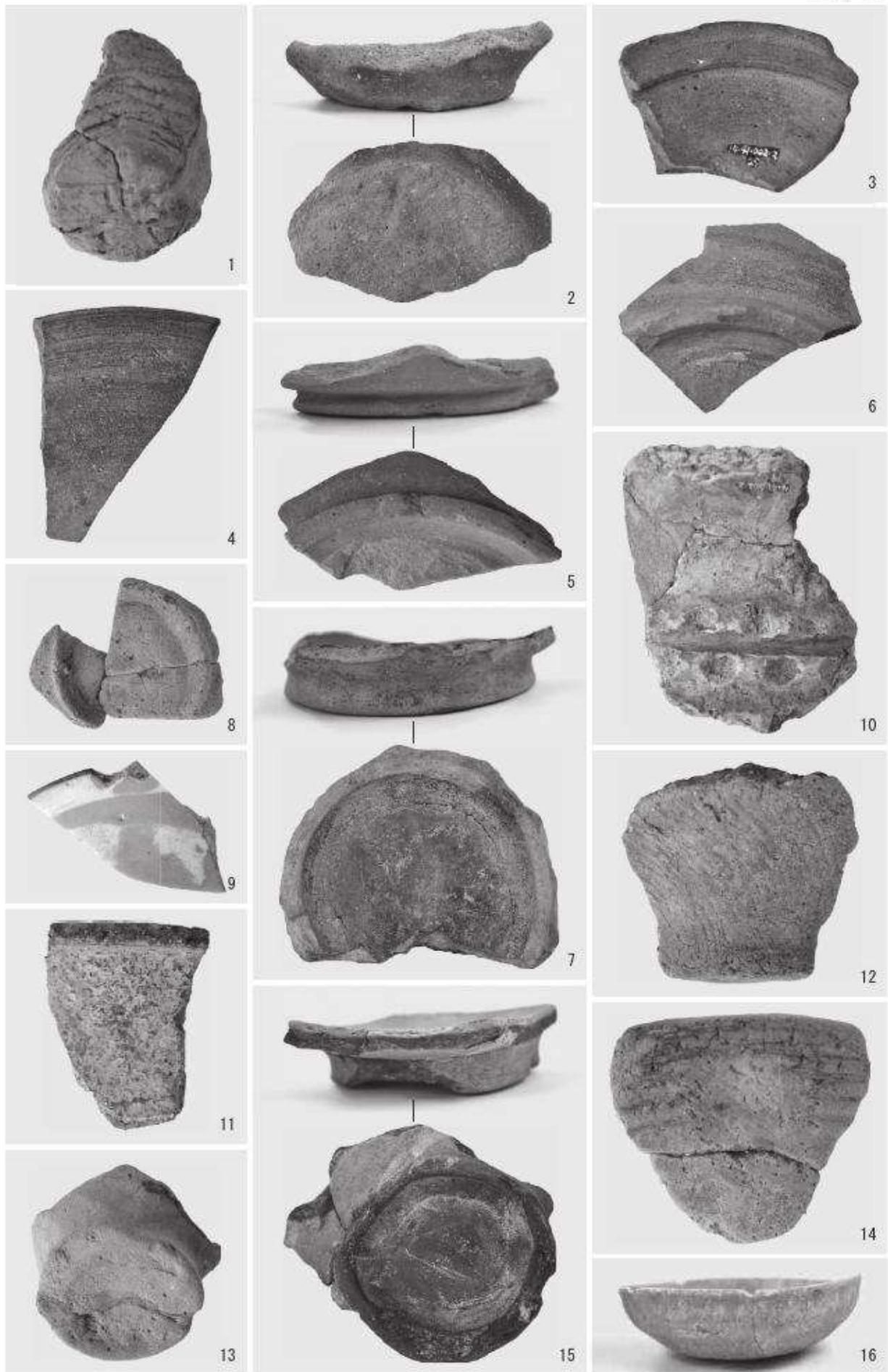


4. 14 区北壁（現有水路から東）
土層堆積状況（南西から）

図版 16

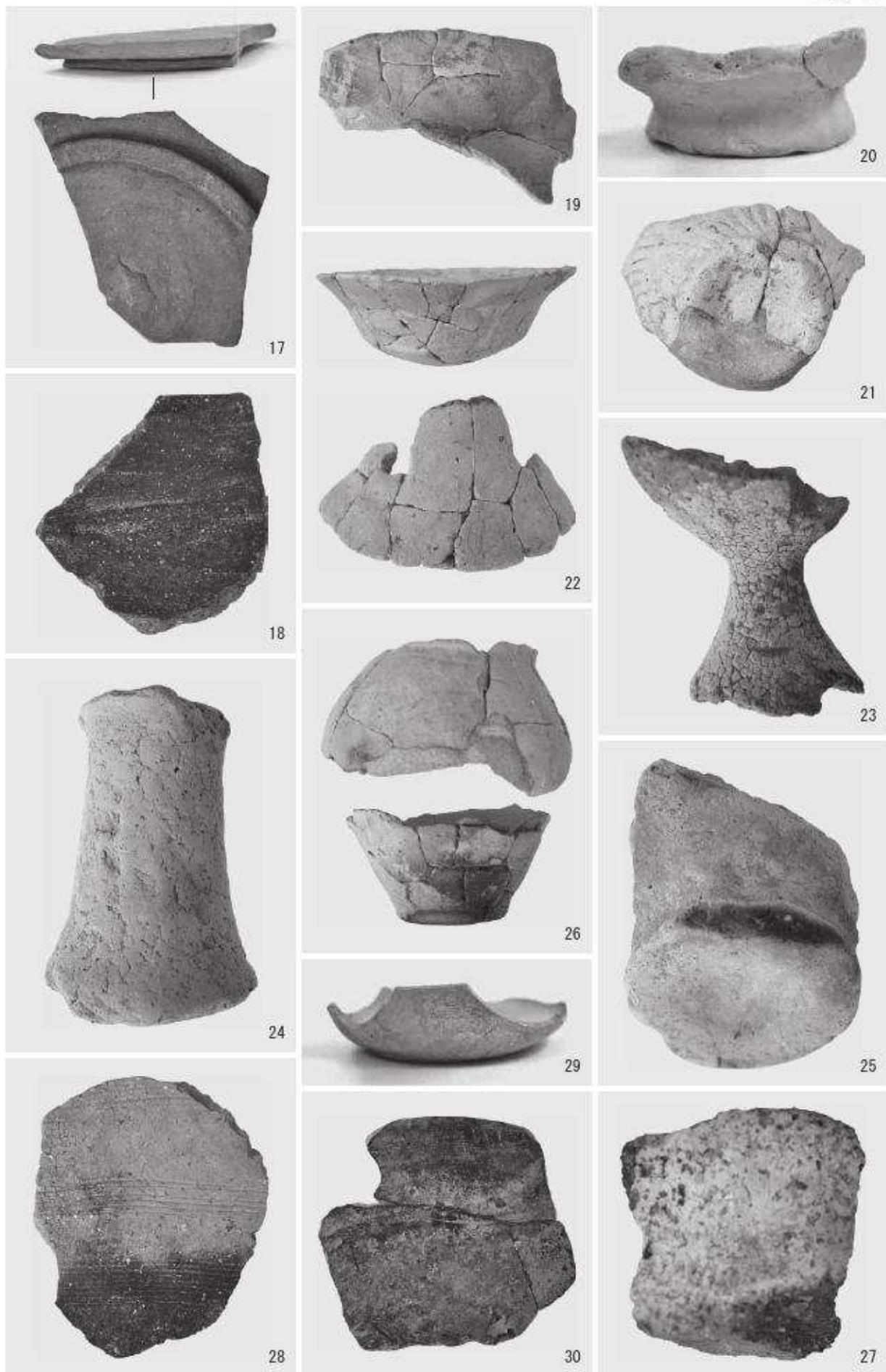


図版 17



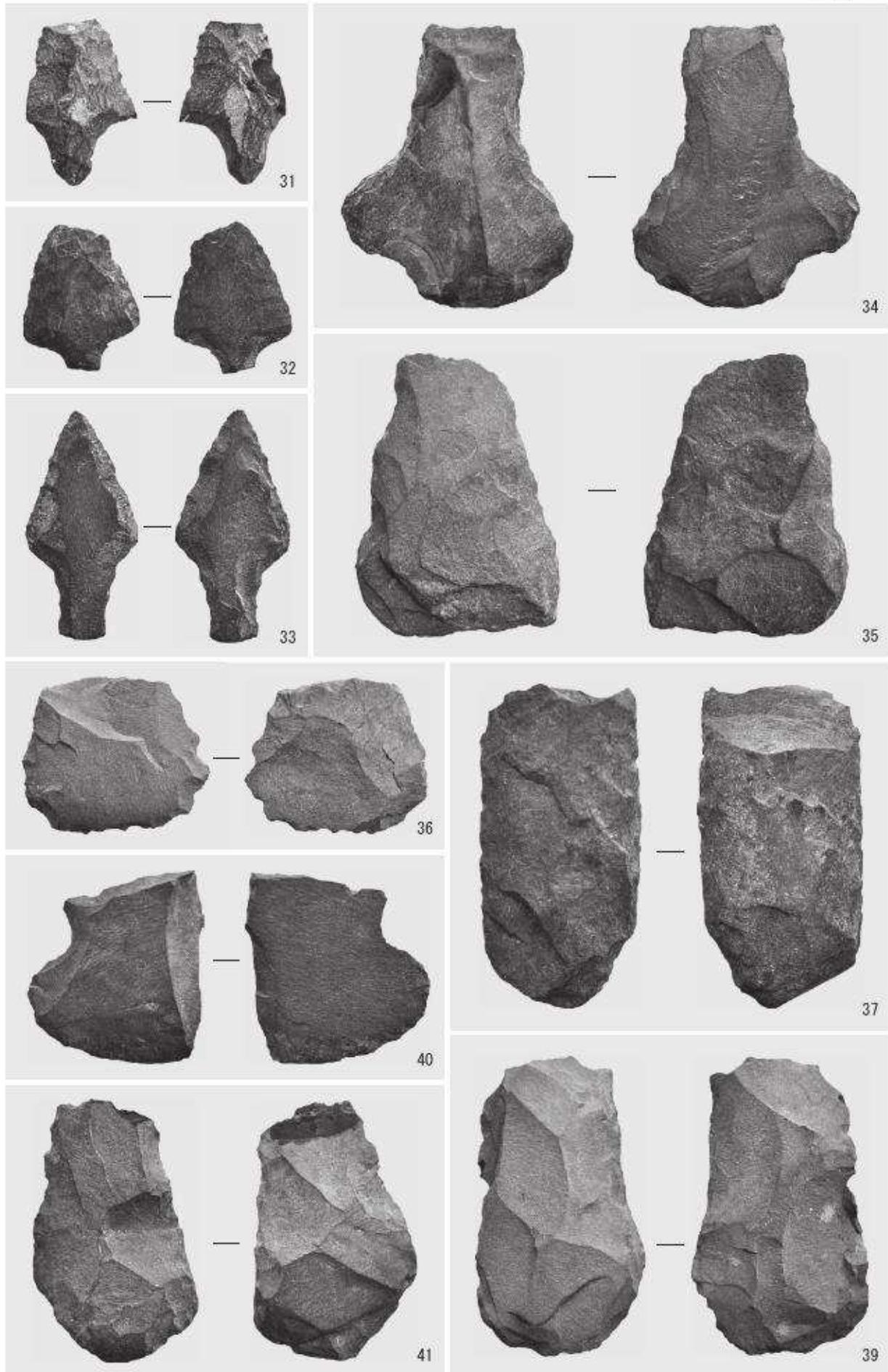
出土遺物(土器)

図版 18



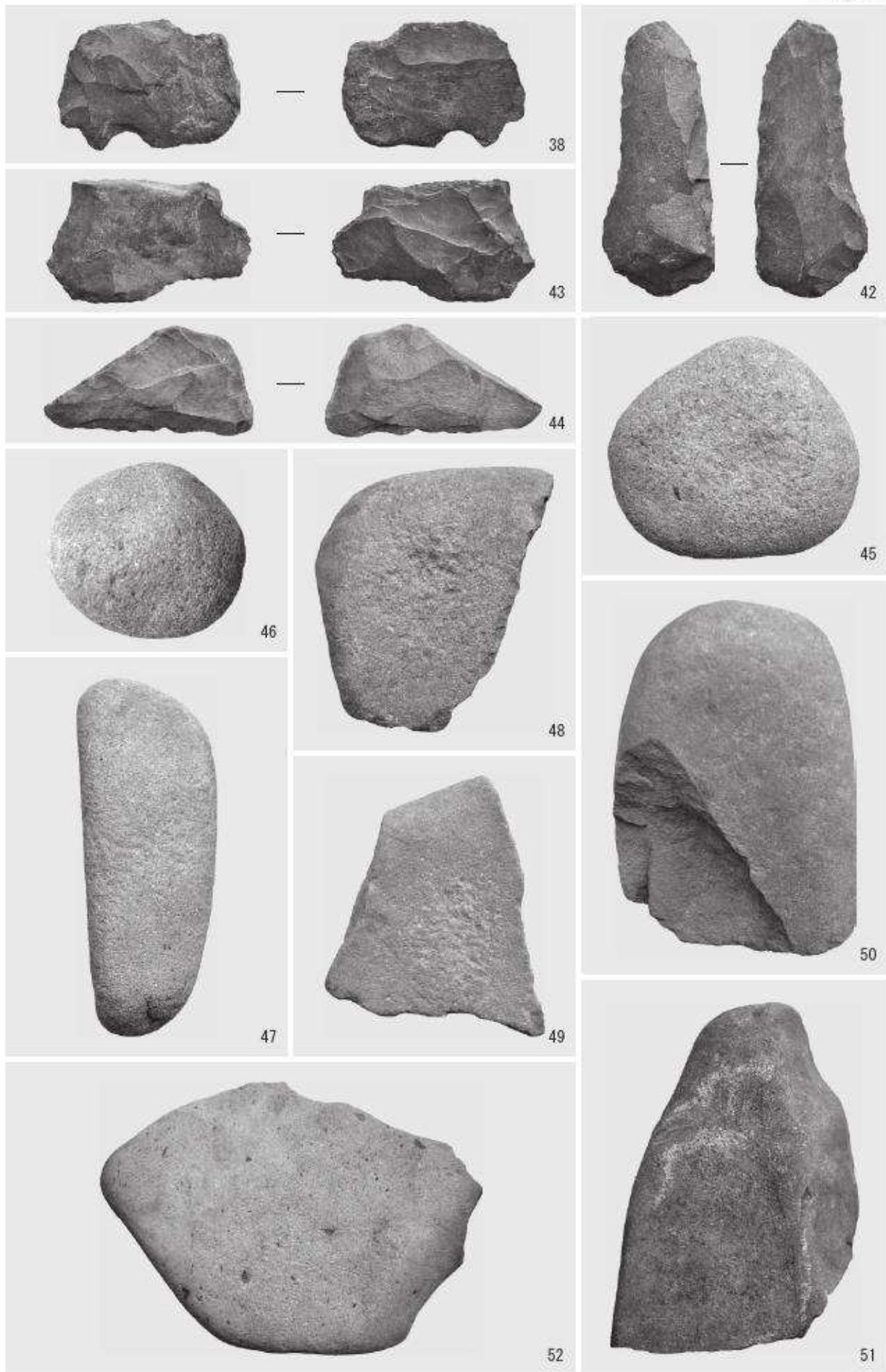
出土遺物（土器）

図版 19



出土遺物(石器)

図版 20



出土遺物(石器)

報告書抄録

ふりがな	たちのいせき							
書名	立野遺跡							
副書名	すさみ町公共施設移転事業に伴う発掘調査報告書							
編著者名	佐伯和也							
編集機関	公益財団法人 和歌山県文化財センター							
所在地	〒 640-8301 和歌山市岩橋 1263 番地の 1 TEL 073-472-3710							
発行年月日	2015 年 1 月							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
立野遺跡	和歌山県 西牟婁郡 すさみ町 周参見	市町村 30406	遺跡番号 002	33° 33' 22"	135° 30' 38"	20140411 ～ 20140916	6,079	すさみ町 公共施設 移転
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
立野遺跡	散布地	弥生時代	溝状遺構 土坑状遺構 自然流路			弥生土器 打製石器	特になし	
		古墳時代	掘立柱建物・土坑			須恵器		
要約	<p>すさみ町公共施設移転事業に伴う発掘調査として 6,079m²を調査した。調査地の地形は北から南に低くなり、谷状地形の最も低い箇所に当たる。調査地の殆どの範囲において、弥生時代から中世にかかる時期の自然流路あるいは湿地状の遺構を検出した。</p> <p>また、北側の高處では、明瞭な溝や土坑といったような遺構を検出した。出土遺物には弥生時代前期の土器に混じり搬入品も微量であるが確認できた。</p> <p>今回の調査では、住居址の遺構は検出されなかったが、居住域は、調査地周辺の西側の微高地と考えられ、今後の調査に期待がもたれる。</p>							

立野 遺跡

—すさみ町公共施設移転事業に伴う発掘調査報告書—

2015 年 1 月

編集・発行 公益財団法人 和歌山県文化財センター

印刷・製本 株式会社 協 和

